

第17回 2025(令和7)年度

# 子どもパイクション文学賞

～見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう～

受賞作品集



もくじ

ごあいさつ

北九州市長 武内 和久

2

選考講評

あさのあつこ／最相 葉月／リリー・フランキー

4

小学生の部



大賞

ひいおばあちゃんの忘れられない人

鈴木

愛渚

10

優秀賞

自転車に乗って

石渡

雄晨

16

思春期センパイ

藤井

晴子

23

選考委員特別賞

あさのあつこ賞

水はこわい

下伊豆

芽依

25

最相葉月賞

ぼくは野球がうまくない

小出

大伍吉

28

リリー・フランキー賞

パパがない

アラン・カーナ

(ペンネーム)

32

中学生の部



# 大賞

木守り柿

宗そう

佑樹ゆうき

34

# 優秀賞

過去形の町、浜通りで学ぶ

安部あべ

愛禾まなか

37

祖母の葬式

前田まえだ

海音みおん

47

# 選考委員特別賞

# あさのあつこ賞

おおきいおうち

谷藤たにかじ

緑ろく

60

# 最相葉月賞

「ちがひ」を乗り越える歌の力と美しいハーモニー創りを教わった  
児童合唱団での八年間と  
ドーソン ソフィーと和奉江

69

# リリー・フランキー賞

海辺の白花

新垣あらかき

結菜ゆいな

87

資料

小学生の部 受賞作品・最終候補作品

92

資料

中学生の部 受賞作品・最終候補作品

93

資料

応募状況

94

ごあいさつ



北九州市長 武内 和久

第17回子どもノンフィクション文学賞を受賞された小・中学生の皆さん、そしてご家族、学校関係者の皆様に、心よりお祝いを申し上げます。

選考にあたり多大なるご尽力を賜りました、あさのあつこさん、最相葉月さん、リリー・フランキーさんをはじめとする選考委員の皆様、また、応募を取りまとめいただいた学校関係者の皆様ならびに本事業を支えてくださった全ての皆様に、深く感謝申し上げます。

この文学賞は、子どもたちが自ら体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」として書くことで、自然や人間、社会に対するまなざしを育み、自分自身の言葉で考え、表現する力を養うことを願い、2009年度から開催してまいりました。また、北九州ゆかりの文学者が築いてきた豊かな文学の土壌を次世代へと受け継いでいくことも、大切な目的としています。

17回目を迎える今回は、国内外から小学生の部109編、中学生の部130編、合わせて239編の作品が寄せられました。その一つひとつの作品から、事実に誠実に向き合おうとする姿勢と、それを自らの言葉で伝えようとする真摯な思いが感じられ、私は深い感銘を受けました。

今回、小学生の部では鈴木愛渚さんの「ひいおばあちゃんの忘れられない人」、中学生の部では宗佑樹さんの「木守り柿」が大賞に選ばれました。さらに10名の皆さんの作品が、優秀賞および選考委員特別賞を受賞しました。この受賞が、皆さんの今後の創作活動における、さらなる励みとなることを願ってやみません。

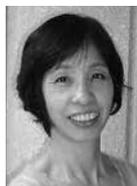
この作品集には、受賞作品をはじめ、子どもたちの瑞々しい感性と豊かな視点が詰まっています。ここに綴られた言葉は、読む人の心に問いを投げかけ、共感を呼び起こし、新たな気づきと静かな感動をもたらしてくれるでしょう。

北九州市は、文化や芸術を通じて、日々の暮らしに、心の豊かさや彩りを感じられるまちづくりを進めています。その歩みの中で、この作品集が、多くの方の手にわたり、言葉の持つ力を改めて感じていただける一助となれば幸いです。

結びに、小・中学生の皆さんの未来への飛躍と、関係各位のご健勝を祈念するとともに、本文学賞が、これからも子どもたちの可能性に光を照らす場であり続けることを願い、挨拶いたします。

## 瑞々しい世界たち

児童文学作家 あさの あつこ



1954年岡山県美作市生まれ。青山学院大学卒業。岡山市にて小学校の臨時教諭を務めたのち、作家デビュー。  
『パツテリ』で第35回野間児童文芸賞受賞。『パツテリ』全6巻で第54回小学館児童出版文化賞受賞。『たまゆら』で読者恋愛文学賞受賞。著書に『NO.6 シリーズ』、『THE MANZAI シリーズ』、『アライン・グリーン』、『烈風ただなか』、『百鬼』シリーズなど多数。

今回も楽しさと苦勞が混ざり合った選考となりました。毎回のことなのですが、小、中学生のみなさんの世界を見つめる目の新しさ、深さに圧倒されてしまいます。知らず知らずのうちに、自分の思考や感性が凝り固まって、古くなっていったのだなあと思い知らされるのです。この『子どもノンフィクション文学賞』の選考に関わるたびに、自分を囲っていた古い壁にヒビが入り崩れていくような心持ちになります。みなさん、とても、刺激的な時間をありがとうございました。さて、小学校の部の大賞は、鈴木愛渚さんの『ひいおばあちゃんの忘れられない人』に決まりました。

本当に面白かったです。一読者として、作品の中にぐいぐい引きずり込まれる気がして夢中で読みました。戦後八十年。既に亡くなったひいおばあちゃんを通じ、戦争を炙り出したこの作品は反戦とか非戦の枠を越えて、ひいおばあちゃんという一人の女性の人間のドラマになっていきます。そのドラマをしっかりと見つめ、しっかりと書き上げた鈴木さんの筆力と人間を見ていく、個性的で確かな目の力に圧倒されました。傑作です。

石渡雄晨さんの『自転車に乗って』は実に爽快な一作です。大都会を神田川に沿って自転車を走らせる。このすごい冒険の記録が、飛び跳ねるような生き生きとした文体でつづられていて、こちらまでわくわくさせてくれました。自分の頭で考え、自分の身体を動かし、自分の冒険の主人公になる。すごい少年だなとひたすら感嘆しています。

『思春期センパイ』は、まずタイトルに惹かれ、中身にうなずき、作者、藤井晴子さんの優れたユーモアセンスに舌を巻きました。家族の日常の中から、こんな温かく新しい物語を見つけ出すなんて、完全に作家の視点で

す。すごい！でも優秀賞に選ばれたから、ニイニに読まれてしまうのでは。そのときのニイニの顔が見たいです。

あさのあつこ賞には、下伊豆芽依さんの『水はこわい』を選ばせてもらいました。プールの水を不潔と感じてしまふ葛藤、弟に負けたくないというプライド。ここまで、自分の感覚を生き生きと生々しく書き上げた力に脱帽です。泳げることが楽しくなって、よかったね。

中学生の部の大賞は、宗佑樹さんの『木守り柿』となりました。短い作品なのですが、一読で心を掴まれました。自然界に返すために、柿の実を一つだけ木に残す。祖父からの言葉を噛み締めて生きる少年の姿は、凛々しくさえ感じられました。お祖父さんの「鳥がいなくなる環境は怖い」という一言。そして作者の「僕は手が届かない位高い所にある柿を鳥と奪い合おうとは思わない」の一文。泣くほど心に染みみました。今、この世界に最も必要なことだろうと思います。安部愛禾さんの『過去形の町、浜通りで学ぶ』は、まず、文体の整然とした美しさに、続いて、過去形で語られることへの眼差しの深さ

に息を吞みました。あの震災を過去のものとして考えがちな、大人へのこれは鋭い警星口であると受け取りました。それだけの力を秘めた一作です。前田海音さんの『祖母の葬式』は、優れた短編小説を読ませてもらった気がしました。家族という枠内での人間ドラマを冷静で、的確につづり、その一筋縄ではいかない関わり方、生き方を描き出します。ノンフィクションというよりフィクションとして、わたしは読んでしまいました。現実をこまごまで物語化できる稀有な力を感じています。あさのあつこ賞には谷藤緑さんの『おおきいおうち』を迷うことなく、選ばせていただきました。この作品の舞台になっている津山市の近くに、わたしは住んでいて、中之町あたりもときどき通ったりします。けれど、それが選んだ理由ではありません。絵本の『ちいさいおうち』と比べ、すでに廃れていくおおきいおうちの姿を数字と自分の感覚を使って、鮮やかに語ったことに、心打たれたからです。読み終えて、おおきいおうちに生命を感じ、せつなさど希望が胸にあふれました。家も人も懸命に生きているのだと。

# 書きたいから書く

ノンフィクションライター 最相 葉月



©新潮社

1963年生まれ。「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、「星新一」「〇〇一話をつくった人」で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞など五つの賞を受賞。他の著作に「音いバコ」「ロンドン・エジンゴ」「セラピスト」「れるるれる」「ダクネ 中国朝鮮族の友」と日本「理系という生き方」「証し 日本のキリスト者」「胎児のはなし」（共著）、当賞受賞者への取材を含む「調べてみよう、書いてみよう」（講談社）など。主なテーマは科学探検と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

書かされたのではなく、どうしても書きたくて書いた。今年はそのような切実な動機が感じられる作品ばかりで、胸を打たれること、教えられることがたくさんありました。伝えたいことがある作品には力があります。

気づいたことがもう一つ。これまでは毎年戦争経験者の聞き書きや戦争をテーマにした作品がいくつもあったのですが、今年はとでも少なかった。戦後八十年とはこういうことなのかと思ひ知りました。

戦争の伝承を考える上でも、小学生の部大賞の「ひいおばあちゃんの忘れられない人」は貴重な作品です。棺には最初の夫の写真を入れてと言ひ残して亡くなったひ

いおばあさん。最初の夫とは著者の曾祖父の弟でした。死亡日を手がかりに調べを進めると、珊瑚海海戦で戦死した636人のうちの1人だったことが判明します。この人が生きていたら著者は存在しません。でも曾祖母が愛した人のかけがえない命と未来を奪った戦争を二度と起こしてはならないと思う。今も海の底で眠る美喜造さんに捧げる鎮魂の祈りです。

優秀作「自転車に乗って」は一緒にツーリングしている気分になる爽快な作品でした。雨は降るし、おなかは減る。川沿いを走っていたつもりがいつの間にか迷子になる。でもスマホやゲームよりずっとおもしろいことがあるという気持ちがあつた。伝わってきました。ご両親の迎えがちょっと早すぎたかな。

優秀作「思春期センパイ」とは思春期真つただ中にいる兄のこと。イライラしたり髪分け目を気にしたりと、そう、思春期っているろめんどくさいよねと微笑ましくなりました。兄を突き放して観察する距離感が絶妙です。たしかに兄に読まれたら困るかも。

最相賞の「ぼくは野球がうまくない」は意外にも、野

球が苦手という話ではありませんでした。たまに練習に顔を出すおじさんから「きみは野球がうまくない」と言われて傷つき、そこから必死にがんばってキャッチャーになり全国大会にも出場。すごいじゃんと思うのですが、これがまったく自慢話には感じられない。飾らない文章がよいのです。

中学生の部大賞の「木守り柿」を読んで、私たちが自然に生かされていることを再認識させられました。鳥たちにお返しするため、てっぺんの柿まで収穫してはいけないという祖父の言葉から始まり、土を返し、種を播き、収穫して出荷する日々が教えてくれる自然への感謝の気持ちを描かれます。近年、日本固有の野鳥が激減し、渡りにも大きな変化が起きていることが気になっていました。本当に見なければならぬものは何かを考えてきかけをくれる作品です。これからも書き続けてください。災害や事故をどう描くかは、プロの作家にとっても大きなテーマです。誰が見ても衝撃的であったり悲壮であったりしてそれだけで伝える価値、読まれる意味があり、いわば書き手はあらかじめ下駄を履かせてもらっています。

す。優秀作「過去形の町、浜通りで学ぶ」は、東日本大震災を経験していない最初の世代としてそんな難題に向き合います。今後の執筆に期待しています。

優秀作「祖母の葬式」は、タイトルからは想像もつかない展開を見せてくれました。著者はとても耳がよく、文章も独自の文体をもっていてぐいぐい読ませます。ただそこが注意点でもあって、ときには筆を抑えることも必要です。書ける人ですから、これからは読者を意識して、アクセルとブレーキの加減を調整してみてください。この先どんな作品を書いていくのかとても楽しみます。最相賞「ちがいを乗り越える歌の力」を読んで、児童合唱団の世界を初めて知りました。練習風景や演奏旅行先で地元の団に見送られるところなど、歌声が聞こえるようです。ハーフであることの葛藤とそれを乗り越えた先に見えた世界がとても魅力的です。日本語は苦手ですが、なかなかどうして、一気読みでした。

# 何を経験し、どう書くのか

イラストレーター・作家 俳優 リリー・フランキー



© HIROSHI NOMURA

1963年、北九州小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞、作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」は06年本屋大賞を受賞、220万部を超えるベストセラーとなった。オリジナル絵本「おでんくん」はアニメ化され、オリジナルグッズも性別世代を超え幅広い人気を集めている。

## 小学生の部

大賞「ひいおばあちゃんの忘れられない人」は、戦争経験者である亡くなったひいおばあちゃんの物語です。欲を言えば、2番目の旦那さんのことをもうちょっと書いてほしかった。ひいおばあちゃんの普通のいとなみも知ってから、写真を入れることになった流れを読みたかったです。でも、とてもいい文章だと思いました。戦争経験者の聞き書きものが本当になくなってきたようになってのも、時代なのかなと思いました。

優秀賞「自転車に乗って」は、自転車で神田川をたどる冒険物語です。やっていることは大そうなことではな

いのですが、彼の文体は大人びていて、人に読ませる文章を書いている。まとまった、読みやすい文章でバランスもよい。大人への接し方や見つけ方など、本能的に上手に文章を書く人の、何かを持っていると感じました。

優秀賞「思春期センパイ」は、妹から見た思春期が始まった兄の物語です。この文学賞には意外とない、異性のきょうだいで、お互いが思春期に差ししかかっている感じなど、ユーモラスに書けていて、すごく読んで楽しい文章でした。

リリー・フランキー賞「パパがいない」は、すごく好きな作品でした。2年生の子どもが、親の離婚を淡々とした、ちょっと写生に近いような見方をしている点が面白かったです。親の離婚や死別は結構多い話ですが、独特の距離感で、文章に接しているなというところ、理屈じゃなくてこの子は面白いなと思います。

## 中学生の部

大賞「木守り柿」は、やっていることも文体も13歳とは思えない。どういう本を読んで、こうなったのでしょ

うか。おじいちゃんからの影響もあるかと思いますが、文章化されたものが、老練な感じがしてすごく面白かったです。このまますすくと、この世界を突き詰めていってもらいたいなと思います。

優秀賞「過去形の町、浜通りで学ぶ」は、学校のプログラムで福島県浜通りに行った経験を記した作品です。この文学賞にも震災後に多くの震災についての作品が送られてきましたが、その中でもこの作品は、文書が圧倒的にうまいなと思って読みました。彼女が文章の中で自分が物書きになりたいという気持ちを標榜しているということもあって、このテーマじゃない作品も読みたいなと思いました。すごく才能のある子だと思います。

優秀賞「祖母の葬式」は、親族の葬儀とか死に対して、面白い見方をしているなと思って、最後まで興味深く読めました。最終的に結局何を言わんとしているのだろうかという気持ちは残りましたが、文章としても面白いし、いいアプローチはしていると思います。

リリー・フランキー賞「海辺の白花」は、この短編の中に井上陽水の「ジェラシー」の歌詞を思い出すという

か、海を語らずして海を見せるというか、小さな風景を見せながら四隅を見せるみたいな、ひとつのいい短編としてすごく記憶に残りました。また、違う作品も読みたいなと思いました。

全体的に、中学生も小学生もこの17年の歴史の中で、コロナの時期というものの過ごし方が如実にあるように感じます。周りに戦争経験者がいなくなっていくとか、子ども時代にコロナを数年体験した、そういう時期の子どもたちからの応募作品だなと感じました。

この文学賞には、たくさん子どもたちに挑戦してほしいと願っています。自分でこの賞を見つけて応募する子もいるでしょうし、学校で書かされて応募する子もいるかもしれませんが、感じたまま、思ったままをぶつけてください。粗削りの、ありのままの原石に出会えることを楽しみに待っています。(談)



小学生の部

# 大賞

ひいおばあちゃんの  
忘れられない人

東洋英和女学院小学部 五年

鈴木 愛渚

今年に入ってから、テレビや新聞などで「戦後八十年」という言葉をよく見かけるようになった。特に七月に入ってから、「戦後八十年を考える」とか、「戦争経験者がいなくなる時代に入る」という特集が増えてきて、私は少し考えた。戦争が終わってもう八十年もの間平和なのは良いことなのに、なぜ大人はこんなにさわいでいるの

か、正直よく理解していなかった。実際私の家族の中には戦争経験者はだれもないはずだ。おじいちゃんもおばあちゃんも戦争が終わった後に生まれている。だから私は、一九四五年八月十五日の終戦記念日と私は何も関係がないものと決め込んで、気軽におじいちゃんに聞いてしまった。

「ねえ、うちの家族は戦争とは関係ないよね。」

とたずねた私におじいちゃんが目をまん丸くして答えた。

「おい、今生きている日本人で太平洋戦争に関係ない人がいるわけないだろ、自分より上の世代の人が戦争の時代を生きてきたんだから。そんなことも知らないのか、もう十一才だろ、少し自分で調べてみる。」

いつもやさしいおじいちゃんがまさかそんなことを言うとは思っていなかったので、私は思わず、

「どんな話？だれの話？いつの話？」

とたくさん質問してしまった。話を聞いていたおばあちゃんとお母さんが、

「そうか、愛渚は小さくて覚えていなかったかもね。ひいおばあちゃんのお葬式、覚えている？」

「ひいおばあちゃんは自分の棺にどうしても入れてくれてみんなにたのんでいたものがあつたの。なんだと思う？」

とお母さんが、こんな真面目な話なのにいたずらっぽく聞いてきた。何を棺に入れたんだろう。ひいおばあちゃん私が五才の時に亡くなった。いつもやさしくおかしをくれたり、お小遣いをくれたりしたことしか記憶にない。考え込んでだまっている私に、お母さんが、

「ひいおばあちゃんには、最初に結婚しただんなさんがあったんだけど、その人は結婚してすぐに戦死してしまったの。だからどうしても死んだ後は一緒にいたいと、その人との写真を自分の棺に入れてほしいとみんなにたのんでいたんだよ。ひいおじいちゃんとはこの世でたくさん一緒にいても十分幸せだったから、あの世ではどうしても最初の旦那さんと一緒にいいって。最初のだんなさんは、ひいおじいちゃんが一番下の弟だったんだって。

戦争中はよくあることだったみたい。ひいおばあちゃんが亡くなるずっと前から何度も家族のみんなにたのむから、最初はみんなびびくりしていたよ。でもあまりに何度も言うから、わかったわかったって話になったの。で、お葬式の時、ちゃんと棺に二人の結婚式の写真のコピーを入れてあげたの。すごい話でしょ。でもね本物の二人の写真はすごく良い写真で、もつたないから、今でもおじいちゃんがとつてあるんだよ。」

と教えてくれた。あまりにたくさんの、私が全然知らなかった情報が出てきて、私の頭はグルグルした。ひいおばあちゃん、最初のだんなさん、戦争、戦死、ひいおじいちゃんと再婚。戦争と全く関係ないと信じ込んでいた私に衝撃の事実が飛び込んできた。

「協力してやるから自分で調べてみる。」  
 といつものやさしい口調で甲子園のテレビを見ながらおじいちゃんが私に言った。

おじいちゃんから教えてもらったことは次の三つ。ひいおばあちゃんの最初のだんなさんの名前は鈴木美喜

造。海軍に所属する通信士。空母に乗っていて、その空母が沈没し、通信士だった美喜造さんは船底にいたから逃げられなかったらしいこと。この三つの事を手がかりに、私は調査を開始した。

まず身近な場所から探す。おじいちゃんの家にあったひいおばあちゃんの戸籍を見ると、昭和十六年十一月二十三日に婚姻とある。しかし次の行に「昭和十七年五月七日夫美喜造戦死。」とあった。この「戦死」という言葉に私はドキリとした。自分の世界の中にこの言葉が現れるとは思わなかった。結婚して六ヵ月後にどんなさんが戦死するってどんな気持ちなんだろう。私の両方の手のひらにじわじわと汗が出る。今まで遠かった戦争が向こうからぐっと私に近づいて来る気がした。

お父さんに相談して、この戦死日からその日に沈没した空母を調べることにした。お父さんと二人で千代田区にある昭和館という歴史資料館に向かい、美喜造さんが乗っていた空母について資料集めを開始した。

「あった。」

と分厚い書籍からふっと顔を上げたお父さんと目が合った。額にはしわが寄っている。

「見て、愛渚。これじゃないかな。」

お父さんの指の先に目をやる。『軍艦における戦死傷者員数調査表』という一覧の中にこうあった。「艦名祥鳳 昭和十七年五月七日被爆、沈没場所サンゴ海、沈没時死者六百三十六名」。ひいおばあちゃんの戸籍の中にあった戦死日と同じ日付だった。パズルのピースはそろった。空母、祥鳳、サンゴ海、沈没、単語がふっと目の前に浮き上がった気がした。

空母とは、船に航空機を乗せ、海の上で航空基地として機能する大型の軍艦のことをいう。空母全体が飛行甲板と格納庫になっていて、飛行機の発着など全てを行うことができたそうだ。つまり、陸上基地のはん囲をこえて航空作戦を展開できる戦略上の重要な役割を担う船だった。だが、祥鳳は元々潜水母艦だったのを戦争がはげしくなったことから急いで空母に改造したため、軽空母とよばれ、他よりも小ぶりで機能の少ない空母となって

しまった。これが祥鳳の致命傷となった。珊瑚海海戦は、太平洋戦争中の昭和十七年五月上旬、日本海軍と連合国軍（アメリカ合衆国オーストラリア軍）の間で発生した戦いだ。サンゴ海に進出する日本軍の計画を暗号読解で察知した連合国軍が、日本を空襲したため、日本海軍も敵空母をつかまえようとして発生したという。五月三日、ソロモン諸島にあるツラギ島を占領した日本軍に対し、翌四日にアメリカ海軍の空母ヨークタウンが奇襲攻撃をしたが、日本側の被害は小さく連合国軍の戦果は少なかった。五月七日午前九時十七分アメリカ軍からの攻撃が始まった。祥鳳はすぐに反撃を開始したが、アメリカ軍はその攻撃をかいくぐり、祥鳳に向かってはげしい攻撃を行った。祥鳳への攻撃が始まってからわずか十分間に魚雷七本、爆弾十三発、敵一機が体当たりする自爆攻撃をした。これにより祥鳳の船体はまたたく間に火に包まれ、船内全ての乗組員に退去命令が出た。しかし、乗員全員が退去せずに最後まで応戦を続けていた。この結果午前九時三十五分、サンゴ海に乗員六百三十六名とともに

に祥鳳は沈んでいった。この戦いは日本海軍が初めて空母を失った戦いだった。しかし、軽空母という小さな空母を失っただけで、日本国内ではこのまま戦いを進めていけるという雰囲気でのこの事実が報道され、一カ月後のミッドウェー海戦へ向かうことになった。十八分間という短い時間に六百三十六名もの人の命が失われたことにおどろき、祥鳳が海に沈みゆく様を撮影した写真を、私はじっと見つめるしかなかった。一分間におよそ三十六人もの人が命を落としたのだ。その中に私の家族が、ひいおばあちゃんの大切な人がいたのだ。

私は、もしも、を考えてみた。もしも美喜造さんが戦死せず、ひいおばあちゃんとずっと生活していたなら、私はこの世に存在しなかった。そう思うと少し複雑な気持ちになった。結婚して、新しい家族を作ってこれからの未来を思い描いていたかもしれないときに出征し、日本からはるか七千キロも遠くの海に空母とともに沈んでいた美喜造さん。そして美喜造さんは戦後八十年が経った今もまだ海底で眠っている。亡くなってもなお自分

の家族のもとに帰ることができていない人生を思うと、私がこの世に存在しなかったかもしれないという思いより、やはり戦争は絶対にしてはならない、その言葉しかない、それしかないという今まで感じたことのない思いがお腹の底のほうからぐつとこみあがってきた。その一方で、この結果があるから私や私の妹が今この世に生きている。自分がすごく矛盾しているようで、口の中に砂が入ってしまった時のようにザラザラとした気持ちになった。誰かが亡くなって今私が生きていることを思うと、美喜造さんを否定してしまうようななんとも言えない気持ちになってしまふ。私は、ふーっとため息をついた。一旦ぼう大な量の資料から目をはなし、窓の外を見る。そこには真つ青な夏空が広がっていた。八十年前もその前もきつと青い空はいつもそこにいた。空はおだやかにそこにいた。いやちがう、突然私はそう思った。あの戦争で犠牲になったたくさんの人たちがいた。その人たちがいたからこそ、今の私たちがこうして八十年の間戦争することもなく平和に暮らせているのではないだ

ろうか。あの戦争で亡くなった日本人は約三百万人と言われている。三百万人をひとかたまりで見るとは、その一人ひとりの人生を、生活を想像してみた。それぞれの人に家族がいて、生活があつて、未来があつた。美喜造さんもその一人だったはずだ。私のひいおばあちゃんと新しい生活をつむぐことを、これから先のたくさんさんの幸せな未来のことを考えていたと思う。でも戦争でその未来は全て奪われた。戦争で犠牲になった人たちの未来をなかつたことにしないために、私たちは今日も明日も生きていく必要があるのではないだろうか。一人残されたひいおばあちゃんは、夫の戦死の知らせを受けて、悔しくて泣きながら届けられた遺骨の箱を開けたという。箱には白い紙がたった一枚入っているだけだったそう。そんなお別れの仕方があつていいはずない。私たちはこの失った人たちの思いをなかつたことにしてはいけないのだ。ひいおばあちゃんの最後の、びっくりする行動で私はこの夏もう一人の家族からバトンを引き継いだ。戦争を忘れないこと、戦争で犠牲になった人た

ちへ思いを寄せ続けること。それが私が受け取ったバトンだ。

来年の夏、学校の行事でオーストラリアに行くことができるかもしれない。もし行くことができたら、私は飛行機の上からサンゴ海をしっかりと見たい。そしてそこで伝えたい。

「家族を代表して会いに来ました、この先もずっと戦争をしない世界のために、あなたがくれたバトンを、私がつないでいきます。」と。



# 小学生の部 優秀賞

## 自転車に乗って

杉並区立新泉和泉小学校 六年

石渡 雄晨

ぼくのあだ名は、ジン。杉並区に住んでる小学五年生。好きなものは、恐竜とレゴ。学校では、友だちと休み時間に、校庭でおにごっこをしている時が、一番楽しい。だけど、いつもどなっている先生ばかりで、本当にいやになっちゃう。

ぼくのなやみは、いっしょに遊ぶ友だちがないこと。これは、放課後のこと。五年生になったら、ほとんどの

子が、塾に行ってるみたい。だから、

「今日、遊べる？」

って聞いても、たいてい、

「ムリ〜。」

って言われちゃう。たまに遊べたとしても、ゲームばかり。ぼくは、ゲーム機もスマホも持ってないから、みんながゲームで遊び始めたら、ただ見てるしかなくて、つまらない。公園で、走り回って遊びたいだけなんだけど、そんなふうには遊んでくれる友だちはいない。

塾とか勉強の習い事はしてないけど、週に一回、運動教室に通ってる。いつも、神田川ぞいの道を、自転車で体育館まで通うんだ。逆上がりは、全然できるようにならないけど、とび箱は楽しい。

七段ギア付きの青い自転車は、ばあばが買ってくれた、ぼくの相棒だ。

夏の終わりの運動教室帰り、いつも通り母さんと、自転車で走ってる時、ぼくはふと、

「神田川って、海までいくの？」

と、母さんに聞いた。社会科で、川とか地形の勉強をして、いつもの神田川が、なんかちよつとちがって見えた気がした。母さんは、

「海まではいつてないんじゃないかなー。井の頭公園から始まつてるから、自転車で川ぞいをずっと走ってみたら。」

って。これは、すごい！ビビツときた。神田川をはじめからはじまで、自転車でたどる。冒険の予感だ。いつもの神田川は、もう全然いつもの神田川じゃなくなった。

ちっとも秋にならない十一月、図書館に行つて、地図を調べた。神田川の部分を全部コピーして、つなぎ合わせる。冒険のための、ぼくだけの地図の完成だ。

地図のほかに、ぼくがもう一つ準備したのが、ゼッケン。ぼくがどんな挑戦をしているのか、見た人がすぐにわかるように、

「神田川を、はじめからはじまで（井の頭公園から隅田川合流まで）自転車で行きます。できれば海を見たいから、浜離宮くらいまで行きたいと思っています。安

全運転でガンバります！」

と、布にかいて、母さんにジャンパーの背中に、ぬい付けてもらった。

全長二十四・六km。男のロマンの始まりだ。父さんは、下見をした方が良くって言うけど、それじゃあ男のロマンにならない。ぼくは、失敗しても良いから、一発勝負で挑戦したいんだ。

二〇二五年一月三日

朝八時五十八分（くもり）

家を出る。まずは井の頭公園へ。父さんが車で、ぼくと自転車を、運んでくれた。地図と水とうも、忘れずに。さっきも書いた通り、ぼくはキッズ携帯もスマホも持ってないからこの日は緊急用に、母さんのスマホを貸してもらった。

井の頭池のはじっこに、

「ここが神田川の源流です」  
 っていう、小さな木のかん板が、立ててあった。源流か

らしばらくは、森の中みたいで、自転車にのって走れるような道じゃないから、自転車を押して歩く。

九時三十五分

いよいよ自転車に乗って出発。冒険の始まりだ。ワクワクしながら自転車をこぎ始めたら、雨が降ってきた。ニユースでは、これまでの一か月間、全く雨が降っていませんって言ってたのに、なんで今日降るんだ。すぐにやんだけど寒くなった。

十時三十分

家の近くまで来た。父さんと母さんがいる！雨が降ったからって、替えの手袋を持って、待っていてくれた。雪遊び用の手袋に替えて、再出発。環七までは、いつも図書館に行く時に通る道だけど、そこから先は、未知の世界だ。

見るもの全部が新しい。中野区に入ったのかな。丸い窓の赤い電車が、いっぱい止まっている。この辺りから、川ぞいを走れないところが出てくる。しんちょうに、家と家の間から見える、川ぞいのサクを確認しながら進む。

信号で止まっていたら、バスから交代で降りてきた運転手さんが、ぼくの背中の中のゼッケンを見て、

「まだだいぶ遠いけど、がんばって！」

と、声をかけてくれた。この冒険の間、他にもたくさんの人から、

「がんばって！」

と、声をかけてもらった。そのたびに、ぼくの中から新しいパワーが出てきた。知らない人が、ぼくを応援してくれていたことが、自転車で冒険をして、良かったことの一つだ。

赤い橋だ。「中野新橋」。後でわかったことだけど、神田川にかかっている橋で赤いのは、この橋だけだった。赤い橋を過ぎたら、新宿の高いビルが見えてきた。都庁だ。街まで来たって感じがする。また雨だ。さっきよりも、強く降ってきた。

十二時十分

雨も降ってきたし、神田川ぞいの東中野のコンビニで、おにぎりを買って、昼休けいにする。お腹はペコペコだ

ったけど、辛そうなおにぎりしか売ってないから、ツナマヨのおにぎりを一個とグミを買った。出発前に母さんが、

「このお金で、お昼やおやつをどうしたら良いか、自分で考えて使ってください。」

と言っ、一五〇〇円くれた。

「一人でハンバーガーを食べても良いの？」

「カレーを食べても、なんでも好きにしたら良いよ。途中で、水とうが空になったり、困ったことがあった時のことも考えて、思いつきで使ったりしないで、計画的にね。」

スゴイ！一人でお店でハンバーガーを食べるなんて、もう大人だ。あの時はそう思ったけど、ハンバーガー屋さんはどこにもなかったし、お腹はペコペコだから、ツナマヨで良いことにしよう。コンビニの外の、ちょっとした屋根の下で、おにぎりを食べて、出発だ。

また川からはなれちゃうし、人が増えてきた。あ、アトムだ。トンネルのかべに、手塚治虫の絵がいっぱい

いてある。「高田馬場」だつて。アトムはよく知らないけど、「ブツダ」は読んだことがある。人が多すぎるし、川は見えないし、おしりも痛くなつてきた。神田川はここだ。曲がり角のたびに、キョロキョロのぞきこみながら、しんちょうに進む。やっと川に合流できた。この冒険の途中、一回だけスマホでグーグルマップを見た。だけど、川ぞいに通れる道があるのかは、グーグルマップをどれだけ拡大しても、わからなかった。それっきり、スマホで地図を見るのはやめた。自分で行ってみなくちゃ、本当のことはわからないつてことだ。

お、赤い電車。都電荒川線だつて。二年前のお正月に、家族で「あらかわ遊園」に行った時に乗った電車だ。あらかわ遊園には、恐竜のメリーゴーランドがあるんだよ。オレンジ色の恐竜に乗れた時は、うれしかったな。

なんだこれは？どうやってこの道路を渡るんだ？工事中だし、信号もどれを見て良いかわからない。ガラスだらけの三角みたいな交番で、おまわりさんに聞いてみる。「すみません。向こう側に渡るには、どうしたら良いで

すか?」

「あそこにいる、誘導員のおじさんに、渡りたいって伝えたら、通してくれるよ。」

「ありがとうございます。」

無事に渡れた。いつの間にか、雨は止んでいた。

ん、あの白い屋根、東京ドームかな。東京ドームが、神田川の近くにあるなんて知らなかったな。

あー！ハンバーガー屋さんと、カレー屋さんが並んでる！どっちも、ぼくが食べたかったところだ。でも、こんなところまでお昼をがまんするなんて、お腹が空きすぎちゃってムリだから、しかたない。

川がすぐく下の方になった。医科歯科大学病院。一度だけ来たことがある。歯のレントゲン写真を、撮りにきたところ。ぼくは生まれつき、上と下それぞれ一本ずつ、大人の歯がないんだって。だけど、何も心配ないって、教えてくれた病院。

「ピリヤード淡路亭」。なんて読むんだ?ぼくは最近、父さんとピリヤードを始めた。こんなところにピリヤ-

ド屋さんがあんなんで、帰ったら父さんに教えなくちゃ。

「秋葉原」。茨城県自然博物館に行く時に、電車を乗り換えたところだ。岩本町の乗り換えは、母さんも初めてで、秋葉原駅の場所がわからなくて、歩いてる人に道を教えてもらって、二人で走ったのが「和泉橋」だ。

川に、屋形船がいっぱい止まっている。もうぼくがいつも見てる神田川と、同じ川には見えない。

十三時三十分

大きな川にぶつかった。これが隅田川なの?「柳橋」。神田川にかかる最後の橋。なんかあつけない。自転車をとめて、橋の上から、隅田川をながめる。さっきまで、ずっと下を流れていたのに、水面が近い。スパイ映画に出てきそうな、未来っぽい船が、隅田川を横切っていく。

「スゴイね!ずっと自転車できたの?」

ぼくの背中のゼッケンを見て、黄色いジャンパーを着たおじさんが、話しかけてくれた。

「はい。井の頭公園から、自転車で来ました。」

「いいね!次はどんな冒険するの?東海道とか挑戦し

てみてよ。応援してるからさ。」

「ありがとうございます！」

次の冒険か！考えてなかったな。そうか、今日の冒険が終わっても、ぼくの冒険が終わるわけじゃないんだ。そう思ったら、体の中からグワツと力がわいてきた。ヨシ！海が見えるところまで隅田川を下ってみよう。

隅田川は、神田川と比べて、川はばがずっと広いけど、川ぞいを走れないところも多くて、川を見失ってばっかり。すぐく都会って感じで、一度川から離れると、どっちに行ったら川に戻るかわからなくなるし、隅田川と合流する小さい川も多くて、どれが隅田川なのか混乱して、迷路みたいだ。これは、帰ってから地図帳を見てわかったことだけど、ぼくは神田川が隅田川と合流した後、隅田川を渡ったことが失敗の原因じゃないかと思う。隅田川を河口に向かって見た時、ぼくは左側を走ってた。隅田川の左側は、合流する小さい川が多い。おまけに、川ぞいを走れないところも多いから、一度隅田川から離れると、どれが隅田川かわからなくなるんだ。ぼくの地

図は、図書館でコピーした白黒で、ペンで色をつけてきたのは神田川と隅田川だけ。これだと、どれが道でどれが川かわからない。次の冒険では、地図はカラーコピーにしよう。

母さんから電話だ！ぼくが迷ったみたいだと伝えると、この辺りは川が多いこと、ぼくが隅田川だと思ってるのは隅田川じゃないことを教えてくれて、まずは来た道に戻って隅田川まで行くように、隅田川に出たら橋を渡って、今までと反対側を走った方が良いことを教えてくれた。

朝から灰色の天気だったけど、夕方になっていくのがわかった。迷ったことで、すぐくつかれた。隅田川に戻って、橋も渡って川ぞいの道を走っていたけど、またすぐ工事中で、川から離れなきゃいけなくなつた。ビルばかりで、川が見えない。本当にこれでいいのか、ぼくは隅田川にそって走っているのか、不安になる。不安になると、どんどんつかれていく。

父さんと母さんだ！迎えに来てくれたんだ！もう浜離

宮なのかな？築地、「勝どき橋」。海は見えそうにないし、白い工事用の囲いが広がってる。この先も川沿いは走れない。

「今はここ、勝どき橋。浜離宮はまだ先だけど、どうする？」

母さんが、雨でボロボロになった地図を広げながら聞いた。地図を見ると、浜離宮までは、もうすぐだ。だけど、工事中で、川から離れてぐるっと回らないといけない。ぼくは、自転車を勝どき橋のはじにとめて、少し歩いて、橋の上から川下をながめた。海はちっとも見えない。それでもぼくは満足だった。

「今日はもう、ここで終わりにする。」

自転車を押して、父さんの車まで行く途中、コンビニでチキンとマスカットのジュースを買ってもらった。車の中はあったかかった。母さんは、走る車の窓の外を指さして、

「歌舞伎座だよ。」

「テレビドラマでよく見る、警視庁。」

「桜田門。ほら、国会議事堂。」

とか、いろいろ言ってたけど、ぼくはほとんど聞いてなかった。買ってもらったチキンは、今まで食べたチキンの中で、一番おいしかった。

神田川を、はじからはじめてたどる冒険は、成功した。海を見られなかったのが、失敗だ。痛くなったお尻は、明日には治るかなと考えながら、お昼に買ったグミを食べた。

ぼくは、すごく良い気分だった。



小学生の部

## 優秀賞

### 思春期センパイ

北九州市立日明小学校 五年

藤井 晴子

今から書くことは、絶対にニイニに見られてはいけない。もし見られたら……

ニイニとは、わたしの兄の事。三つ年上の中学二年生。わたしとちがって物知りで、お母さんに言われなくても、勉強や宿題をする。ニイニは中学校に入学したところから、思春期というのが始まったらしい。わたしにはまだわからない。体の中の「はりがね虫」にあやつられていると、

お母さんが言っていた。

夏休み、わたしがソファにゆっくりね転んでいると、ニイニが「半分っ。」と言ってすわってくる。わたしがちゃんと半分によけているのに、「ちよっと出てる。」と、ぐちぐち言うってくる。

夜ごはんの時だって、すこし足が当たっただけですぐにおこる。さらにわたしのお気に入りのスリッパをわざとふんづけてくる。そんな時わたしは、「はりがね虫のせいだ。」と自分に言い聞かせている。

わたしがみたいテレビ番組をみようとしたら、ニイニが勝手にニュースにチャンネルを変えすることもある。そのことで二人でけんかをしていると、お父さんに「じゃあテレビを消しなさい。」とおこられる。わたしの心はちよっとモヤっとする。

ニイニはよく、せまい部屋でサッカーをしている。おし入れに向かって何度ボールをけていると、わたしが一生けん命つくったペン立てに当たって、ぐちゃぐちゃになった。わたしがそれをお父さんとお母さんに言い

つけると、ニイニをしかつてくれた。そのしゅん間、わたしは超ハッピー。それからしばらくボールを当ててこなくなっただけ、最近また、つくえにボールを当て始めた。「まったく、反省できないはりがね虫だ。」

ニイニは朝起きると、学校に行くまでずっと鏡の前で、前がみの分け目をいじくっている。わたしにとっては、朝からすぐくじゃまだし、分け目のちがいはほとんど分からない。時間のむだじゃないのかな。家族と出かける時は、いつも同じ服を着ているくせに、友達と遊びに行く時だけ、ちがう服を着て出かける。おしゃれに気を使ったり、見た目を気にしたりするようになった。思春期って何かこわい。

むかしのニイニを思い出す。いっしょにボール遊びをしてくれたり、誕生日の時にびっくり箱を作ってくれたり、むかしは別人のようにとってもやさしかったのに。やさしくておもしろくて、楽しいニイニにもどってきてほしい。

私もニイニみたいになるのかな。お父さんもお母さん

も、みんなそうだったみたい。きっと、大人になるための準備なのだ。保健の授業でも習ったことだ、仕方ない。自分にも思春期は絶対来るのだと言いつけさせる。

それに、ニイニはわたしより先に生まれたから、思春期がどんなものか知らなかったと思う。それにくらべて、わたしはニイニがいてくれる分、心の準備ができています。だから、先に生まれてくれたニイニにはほんとうは感謝している。わたしは心の中で、ニイニのことを「思春期センパイ」とよんでいる。



小学生の部  
選考委員特別賞

## あさのあつこ賞

### 水はこわい

京都市立明德小学校 五年

下伊豆 芽依

私は、学校のプールに顔をつけれない。なぜなら、学校のプールは汚いからだ。プールの水には、ハエやカの死がい、かれ葉やみんなのつば、だれかのバンソウコウが浮いている。一番きらいなのは、はがれたペンキのかたまりだ。外から見るときれいなプールも、中から見ればとても汚い。私は、汚い水に顔をつけると、鼻のあなに水が入ってしまつて、一緒に汚い物が入ってしまう

かもしれないと思うから、私は絶対に汚い学校のプールには顔をつけたくない。

でも、私はもう五年生だ。一度でいいから水に浮いてみたい。ずっとそう思っていた。そんな私にライバルが現れた。その名は、下伊豆榮作、私の弟だ。二年生の弟とはり合うなんて、なさけないけれど、私は弟にだけは絶対に負けたくない。

ある日のこと、弟がけのびで五メートル泳いだと聞いた。私は自身の耳をうたがった。弟は、二年生の時、泳ぐことができず、葉が入っているからきらいだった。そのきらいなはずのプールで弟は五メートルも泳いだ。私がプールに顔をつけれない間に弟は、プールが好きになり、泳げるようになっていた。私は心の中でくり返した。「うそだ」「五メートルも泳げるはずがない」「まだ二年生なのに」と、許せなかった。私を置いて、一人で泳げるようになるなんてずい。私の予定では、弟より先に泳げるようになり、父や母にも弟よりもずっと長いきよりを泳げる所を見せたかった。そして、弟に水泳を

教えてあげる未来を想像していた。それが当たり前だと思っていた。だから、弟が泳げたと聞いて、とてもびっくりした。そして、その出来事が私のライバル心に火を灯した。それから、私はこう考えた。

「じゃあ私が弟よりも、長いきよりを泳げるようになれば、最初の予定通りになる。」と、弟には「すごい」と言っておきながら、心の中では、こんな事を考えていた。

今思えば、少しひどい話だと思う。三才も年のちがう弟と、いつもはり合ってばかりいる。とてもはずかしい。でも、それが分かかっていてもやっぱり弟とはり合ってしまう。そんな自分がなさない。でも、絶対に弟より長いきよりを泳げるようになりたいという気持ちは変わらない。

残り二回の学校のプール私は、自分と戦っていた。泳げるようになりたいけど、しずんでしまうし、鼻のあなに水が入るのもこわい。水泳というじゅ業はなぜそんなに怖いか。その理由を探してみた。時は、一九五五年、

つまり七十年前にさかのぼる。紫雲丸という船がせと内海でちんぼつし、修学旅行中の中学生などが一六八人死ぼうした。その事故をきっかけに水泳のじゅ業が始まった。さらにその年、三重県津市の海岸で、水泳のじゅ業中に百人が溺れ、その中から三十六人死ぼうする事故も起きた。この二つの不幸な事故だけでも、一年で二百四十八人死ぼうしていることになる。もしも、そんな事故が毎年続いていたら、私が生まれてから、二千四十人が死ぼうしていることになる。そんな事故を知り、やっぱり水はこわいと思う。だけど、同じような事故にあわないためにも、泳げるようになった方がいいと思う。夏休みが始まると、五メートル泳げるようになった弟がプールへ行きたいと言った。七月二十四日の木曜日、私は家族でスプリングスひよしのプールへ行った。スプリングスひよしのプールは学校のプールと同じで長さ二十五メートル、深さは百二十センチメートルある。だから、身長が百センチメートルしかない弟は、子ども用のプールでのびをしていた。それを見た私は、五メートルではな

いけれど、弟が本当に泳いでいたのであせてきた。そこで私は、母と一緒に深いプールのすみっこで浮く練習をすることにした。ビートバンを使ってみたり、ヘルパーをまいてみたりしたけれど、どれも上手く行かない。弟は泳げるのにと、もうあきらめそうになったその時、母が「ママの足のおや指をさわってみて」と言った。プールの底についている母のおや指はとても遠い。思いきって顔をつけて、手をのばし、さわろうとするのにさわれない。どうしてだか、さわる前に体が浮いてしまうのだ。だから私は母に「ムリ」と言った。すると母は笑って言った「浮いてるやん」そこで初めて自分の体が浮くことに気づいた。五メートルのけのびで六級になるので、五メートルを目指して泳ぎたいと思った。でも、初めて泳ぐのだから、もちろん息つぎのし方は知らない。夢中で足を動かし、早く五メートル泳いで息を吸うしかない。溺れないように浮いてやる。だれだつて命がかかると夢中になってしまうのだ。私はたちまち五メートルより少し長いきよりを泳いだ。息が続かなくなりそうになった

時に頭に浮かんだのはけんばんハーモニカだ。二年生のころ長い音をけんばんハーモニカでどこまで吹けるか、を毎日やって記ろくをのばしていたことがある。けんばんハーモニカを吹くつもりで五メートルちよいを三回泳いだ。溺れそうになりながら息つきらしいものを五メートルで二回。合計で五回、全部で二十五メートルも泳いだ。私はいつのかまにか泳げていて泳ぐことが楽しくなっていた。

泳げるようになったのはとてもうれしい事だけど毎年夏には溺れてしまう人達がいる。

私は、泳げるようになったけれど、自分が絶対に溺れないとは思わない。川や海なら急に水位が上がったり、流れが速くなったりするかもしれないし、自分の体の具合がとつ然悪くなったりするかもしれない。そして、一九五五年に死んでしまった人と私のちがいは一対一で大人に見てもらっているかどうかなので一対一ではない時はとくに気をつけることを意識しようと思った。



## 最相葉月賞

ぼくは野球がうまくない

聖ドミニコ学院小学校 五年

小出 大伍吉

ぼくは野球がうまくない。

ついでに言う運動神経もあまりよくない。

そんなぼくがどうして野球を始めて今も野球を続けているのか思い出してみた。

二〇二二年七月にぼくはある野球アニメに夢中になった。主人公がチームメイトやライバル達と競いながら甲子園を目指す話だ。

ぼくはピッチャーの主人公よりもヒットを打つわき役の方がお気に入りでもそんな風になってみたいと思つて二年生の時に野球を始めた。

最初はキャッチボールでチームメイトのボールを全く取ることができなくてすごく悔しかった。家でお父さんとたくさん練習をしてボールを取るのには慣れてきたけど、ボールを投げるのはなかなか上手くならなかった。みんなが当たり前のよう遠くにボールを投げられるのに、ぼくは投げられないのが当時は一番悔しかった気がする。

三年生のときに六年生の試合に交代でいっしょにレフトでれた。速い打球が自分のところにとんできた瞬間、せすじがひやっとして体が全く動かず、打球をうしろにそらしてしまった。ボールを取るのとはなれてきた所だったのとれず、それがとても悔しくて必死に練習を続けた。

その後、宮城県の大きな大会で準優勝する事ができた。スタメンで最後まで出場できて準優勝できたのがとびは

ねるぐらいうれしかったし、今までの練習の成果を出せた事がよりいっそうぼくを、やった！よくがんばった自分！という気持ちでいっぱいにした。

ぼくの野球人生は楽しくて順調だ！と思っていたが、その年このチームをやめることになってしまった。

理由はぼくだけが下の学年と練習するように、と言われ、同級生のチームメイトから取り残されてしまったから。

「きみは野球がうまくないから下の学年と練習しろ」とチームにたまに顔を出すえらいおじさんに言われたのだ。

スタメンで試合に出てヒットも打ってみんなと楽しく練習するのにどうしてなんだ。

ぼくは一生けん命にがんばってきた自分の時間が役に立っていない、と言われているような気がして、くやしかったし、悲しかったし、切なくてたくさん泣いた。おじさんの言葉を思い出すたびに涙があふれてしまった。多分、すごく心がぎずついた、というのはいかような事な

のだろう、と思った。でも野球は好きだったので二つ目のチームに入った。

このチームはとてもきびしくて、初めて野球を辞めたと思うほどだった。チームに入って五ヶ月くらいたったある日、いきなりキャッチャーをやれ、と言われた。キャッチャーミットも防具もさわった事がないぼくは、大事な全国大会予選直前にやれ、と言われて本当にびっくりした。

それからは今までの練習とは比べものにならないくらい必死にキャッチャーの練習をした。

キャッチャーは、動きづらいのに立ったり座ったり、ランナーの動きから目をはなさないようにしたり、ボールを後ろにそらさないように体にボールを当ててストップしたり、ピッチャーの投げる球種にサインを出したりと、動いたり考えたり想像以上に大変だった。キャッチャーの練習を始めたばかりの時は、考えなきゃいけないことがありすぎて、ぼくの頭はパンクする直前だったと思う。

そしてかんとくやコーチからおこれやすいのもキャッチャーだ。ヤクルトにいた古田選手が野村かんとくによくおこられた、と言っていたけどこれは、キャッチャーにあるあるなのだろうか？損な役回りだなあと考えた。お風呂あがりに保湿剤をぬってくれるお母さんに「これも、これも、こんなところもボールがぶつかったアザなの？」とおどろかされたけど、自分でもボールが当たっている事に気がつかないくらい必死だった。

全国大会の予選が始まり、ぼくはキャッチャーとして四試合にフル出場した。結果はあと一勝足りず、全国大会には行けなかった。先ばいたちを全国大会に行かせてあげたかったけど、ギリギリのところまで負けてしまい、本当に悔しかったのでチームメイトみんなで目標を立てた。

「来年は絶対に全国大会に出場しよう」

そこから一年、みんなで全国大会に行くために気合いを入れて練習をした。ぼくはキャッチャーが定位置となった。前はパニックになるぐらいドキドキしながらプレ

ーしていたのに、少しずつスムーズになってきた。

キャッチャーをやるようになって大変だけど、他のポジションでは味わえない楽しさもある事も知った。

例えば、色んなピッチャーの球を受けられるのは面白いし、ボールの取り方でしん判からストライクをもぎとることも出来る。きん張しているバッターもすぐに分かるし、逆に打ちそうなこわいバッターも分かる。今はキャッチャーが一番好きなポジションだ。

次の年、ぼく達は全国大会に出場できた。みんな目指した全国大会に本当に出られたのだ！

ぼくも背番号二のキャッチャーとして試合に出場した。一年間キャッチャーとして頑張ってきた自信があったから不思議ときん張はしなかった。

あこがれの全国大会は一日で終わってしまった。一回戦はとっぱしたけれど二回戦で負けてしまったのだ。ぼくは同点タイムリーヒットを打った。でもパスボールもしてしまった。負けた時に試合が終わっても、片付けが終わっても、ずっと泣いていた。悔しいし、まだ試合を

したかったし、自分のミスにはらがたつた。顔も心もぐちゃぐちゃだった。

お母さんが「たくさん涙がでるのはたくさんがんばった証だよ。」とはげましてくれた。

ぼくは最初、アニメを見てヒットが打ちたくて野球を始めたのに、気が付いたらキャッチャーが楽しくて野球を続けている。

ぼくをきずつけた、野球がうまくない」という言葉。

今も野球はうまくないけれど、毎日少しずつがんばっていたら、ボールを取れない、投げれないというぼくがチームで一番ボールを取って、ホームから二塁に送球するキャッチャーになっていた。

ぼくは、うまくない、は、のびしろがある」と考えることにした。そう考えるともうきずつく事はない。

ぼくは野球がうまくない。

でも野球が好きだから、これからも自分の、のびしろを信じて少しずつでものびていきたい。



## リリー・フランキー賞

パパがいない

アラン・カーナ

(ペンネーム)

わたしは、ママとパパがりこんしました。どうしてかというところだけがけんかしたからです。

わたしだったら、そんなりゆうで！とおもいます。

今わたしは、ママと2りでくらしています。なんでママをえらんだかというと、パパは、ママにいじわるをして、わたしだけかわいがつてママがかわいそうだからママのほうをえらびました。

ちなみに、いちばんママがかわいそうだったことは、なつは、おしりに、あせをかく、パパなので、おしりの中にティッシュをいれているのですがそれをママのくつをごみばことして、ティッシュをいれていたことです。なので、2りでくらしています。2りでもたのしいです。

パパとママがけんかして、いちばんつらかったことは、いまは7さいの小学二年生で、3年まえぐらいの5さい年中さんのとき、キッチンの、しょくたくのいすをつくえにすわって、むかいあってパパとママが力づくでけんかしていたことです。パパにだっこされながら、けんかをしてたので、そのけんかで「ぎゃー」とは、なかなかで1てきなみだをながして、パパがそれに気づいて、ティッシュをもってきて、なみだをふいてからママに「こらつ、ないたじゃないか1てきだけがないたは、ないただ。」と大声でいったので、こわくてこわくて、しかたがなかったです。それでパパがパパのへやへおくつていってまたそれから力づくのけんかがはじまりました。

ちなみにパパは、ハゲです。ママは、むかしは、おだんごむすびですが今は、かみのけをみじかくして、ツーブロックです。それでパパは、そのママのおだんごむすびを「やめる。」と言っていました。それがいいもむかしは、おくじょうつきの4かいだての家でしたが、いまは、2かいのあばーとですそれで1かいにすんでいます。もちろんママとです。1りっこです。あとは、ならいごとはピアノです。3人ぐらしのときにいろいろなけんかをみました。パパがママにめいれいをして、きかなかつたらけんかして、あとは、けんかしてるときに、かいだんからほんとうにおとされてないけどパパがママをおとそうとしてたときもありました。いまは、学校でいじめられるけど、だいすきなともだちがいるし、家も学校にちかいし、目のまえのうちと右のうちにもだちがすんでるからパパがいなくてもたのしいです。これからもママといっしょにたのしくらしたいです。いまは、ともだちとあそんだり、家にあそびにいたり、ほかにいろいろあります。そのなかでいちばんすきなのがゲームと

いとことあそぶことです。パパは、はなれた家ぞくとしていきたくとただけどママは、あたらしいパパがいいっていってました。わたしは、はなれても家ぞくがいいです。



中学生の部

# 大賞

## 木守り柿

明治学園中学校 一年

### 宗 佑樹

僕は畑で野菜や果物を育てることが大好きだ。昨年は落花生を初めて育てた。落花生の花を見た時は、驚いた。この白い花が土に落ち、土の中で落花生になるのだ。だから落花生。土がないと落花生は育たない。

夏には毎年スイカを育てている。スイカ作りはカラスとの知恵比べだ。カラスはグルメなのでスイカが美味しくなるまで待っている。スイカの中身が熟すころにカラスは食べに来る。その頃になると僕は大きな網のかごをスイカにかぶせてスイカを守る。今年はメロンの種を発芽させ、メロンを育てた。僕のメロンはうす緑色で、見た目はウリだった。だからなのか、カラスに狙われず無事に成長した。切ってみると、中身はメロンでとても美味しかった。皮もやわらかかったので、スイカの皮でいつもするお漬物にした。こちらも絶品だった。そのメロンの種はまた来年植えるつもりだ。僕はメロンの種の力、土、日光、水の力を借りてメロンを育てることができた。僕のでできたものは何一つない。このメロンも自然界のたま物だ。

「この柿は木守り柿だから残しておかんといけんよ。」

今年の冬も祖父の畑にある柿の木が一番上には、大きな柿が数個残されている。祖父が言うには、一番上に来ていた柿は自然界や鳥などにお返しする物であり、木への感謝も込めて、全ての柿を人間が食べるべきではないという。

冬になると、祖父の畑でできた大根や白菜をいただく。味も濃いので、野菜そのものの味で美味しくいただける。大根の葉っぱもとても美味しく、飼っているインコは無農薬の大根の葉っぱだと食いつきがまるで違う。白菜を育てる際には、冬の寒さや霜から白菜を守るため、白菜に「はちまき」を結び付ける。白菜の頭縛りだ。僕は祖父のようにしっかりと頭縛りができないので、僕の「はちまき」をつけた白菜の外葉は虫に食べられ土もついてしまう。だが、この虫達が微生物と共に土を作ってくれているから良い土壌ができ、僕は美味しい野菜や果物を食べることが出来る。僕達が食べている野菜や果物は様々な生きものが関りを持ち、共生しているお陰でできている。

僕は鳥の声や風の音を聞きながら季節の野菜や果物を育てている時、有難い気持ちになる。カラスと知恵比べをしている時でさえ、僕は鳥に感謝している。祖父はお仏壇にお供えをした後のご飯は、畑に来る鳥達のために畑の隅にそっと置いている。鳥のフンの中に種があるの

か、毎年珍しい花が意外な所に咲いている。学校で習った「花鳥風月」という言葉を思い出す。日本人は元々自然界の美しい風景を観て楽しみ、自然と共に生きてきたのではないのか。祖父は、「鳥は住みづらいと感じたらすぐにいなくなるから鳥がいけない環境は怖い。」と言っていた。

空を見上げ遠くの国に思いを馳せると、未だに戦争をしている国が思い出され心が痛む。国は違ってもみんなこの地球という環境に生かされている仲間のはずだ。僕はみんなが木守り柿の気持ちをもつてくれることを願う。僕は手が届かない位高い所にある柿を鳥と奪い合うとは思わない。鳥や自然界にお返しする物と言われれば納得できる。なぜ同じ地球という同じ環境に生かされている仲間が戦わなければならないのだろうか。柿の木は人間の力だけでできたものではない。それに気がつけば欲張る気持ちや人と争う気持ち、ましてや自然環境を破壊する行為などできないと思う。同じ環境に生かされているあらゆる生きものに感謝の気持ち、共生する心、

人を大切に思う心が自然に湧き上がってくるのではないのだろうか。他の生きものや自然界への感謝の心はきつと僕達の心を暖めてくれ、優しい気持ちに繋がると思う。僕達日本人は元々、木守り柿が象徴する他者と共生する静かな思いやりの心で周りとの和を保ち、自然界に生かされていくことに感謝し生きてきたと僕は思う。

今年も沢山柿が実っていた。祖父はご近所の方に柿をおすそ分けをしていたようで、祖父の畑で白菜に「はちまき」を結びつける作業をしていた僕に、ご近所の方がぶどうジュースをお礼に下さった。誰かを思い親切にしたことが結局、親切をした人の孫の僕に返ってきた。誰かを思い親切にした行いは結局、自分や自分の身近な人に返ってくる。どんなにA Iの技術が進歩しても、こんなに素敵に柿をぶどうジュースに変えることはできない。自分以外の誰かを思いやる心の力にA Iは勝てないと思う。木守り柿は木の上から、僕がぶどうジュースをいただき驚き喜ぶ様子とその反応にご近所の方が笑顔になるのを見て、来年もまた美味しい柿を実らせよう

と思ってくれたのではないかと思う。

今日も僕は畑に向かう。空からジョウビタキの鳴き声が聞こえ、僕は安心する。地面では珍しい花が僕を静かに見守っている。木の上からは自然界にお返しした木守り柿が、僕の心も守ってくれている。僕も祖父のように白菜に「はちまき」をしっかり結びつけられるようになったら、僕が木守り柿を受け継ごう。木守り柿の心が全ての人の心に届きますように。木守り柿、ありがとう。



中学生の部

## 優秀賞

### 過去形の町、浜通りで学ぶ

牛久市立牛久南中学校 二年

安部 愛禾

私は二〇一一年九月生まれです。これが何を意味するかというと、東日本大震災を経験していない初めての世代です。当時の記憶は全くないものの、両親曰く、茨城県南部にある我が家も壁が一部崩れたらしく、はいはいを始めた私は工事が追いついていなかったそれを拾っては口に入れようとしていたそうです。

三月十一日はなにか「特別な日」だ、というのは知っ

ていました。社会の教科書で習ったり図書館で一分間黙祷の時間があつたりと、身の回りで感じる事が多かったからです。しかし、それはあくまでも「そうらしい」ということであつて、実際に震災の揺れを経験していない私にはその重要性がいまいちわからないでいました。そんな私に変化をもたらしたのは、中学校一年生の秋に参加した、学校のプログラムです。

私が通う学校には、宿泊型体験学習というものがあります。これは一般の学校という林間学校や職場体験に似ていて、全国のような場所に十から二十人ほどで出かけ、その土地にまつわるイベントやフィールドワークなどを体験します。自由参加で、申し込んで抽選にあれば参加できます。

中学一年生の九月、私が福島県浜通りで行われるプログラムに参加が決定した時、私は両親に「あの浪江に行くのか」と言われました。浜通りは、東日本大震災で原発事故の発生源となった福島第一原子力発電所がある地域で、浪江町はその地域の一部です。そのプログラムは

浜通りで原発事故にまつわる資料館や小学校を訪れ、現地で活動する人々と対話し、そこで感じたことを絵画や粘土、コラージュなどアートを使って表現するという趣旨のものでした。

『あの『浪江』が何を意味するのか、私はよくわかりませんでした。

参加前の私は、浜通り（浪江町・双葉町・大熊町・富岡町）が原発の影響で一度「人間が住めない町」になり、現在もその名残があることも、日本国民が三月十一日に何を見て何を感じ、浜通りにどのような印象を持ったのかも、まだ知りませんでした。

世の中には「三・一一を伝える」という趣旨の本や映像が溢れています。でもそのどれもが、自分で覚悟しないと触れる機会がないのです。日本国民の多くが、特に私からの世代は三月十一日を「歴史」として学ぶと思えば、これ以上勿体無いことはないと感じました。私自身、プログラム参加前は東日本大震災についての解像度が低く、数値や地名などを知識として覚えることしかし

ていなかったもので、現地に行き、これまで抱いていたイメージがどんなに曖昧なものだったのかを思い知らされることになりました。東日本大震災はただの震災ではありません。その恐ろしさは数値だけを見ても明らかで、死傷者・行方不明者は二十万人を超えます。ただし、その数値だけが私たちが得るべき教訓ではないと思います。浜通りに足を運び、被災者と共に過ごすことで、災害に対する政府のアプローチや人々の恐怖、日常が当たり前存在することの奇跡など、私たちの生活の根幹に関わることを学ぶことができました。

通常、社会の教科書では、東日本大震災について数値や画像で触れることが多いです。世界的に大きな災害であり、戦後最悪の事故だったと言われます。

しかし私は先述の通り、今回浜通りに実際に足を運んだことで、それらがあくまでも一面でしかなく、それどころかもっと掘り下げる価値がある重要な出来事だと感じました。視覚的に感じる衝撃だけが、その事故の全てではないと思ったのです。

プログラムの最初の舞台は浪江でした。福島第一原子力発電所がある双葉町の隣の町です。

着いて早々、感じたことのない違和感に襲われました。ソーラーパネルが多いのです。移動する最中に見える風景の多くは、草原かソーラーパネル、たまに白くて大きな工場。海岸に近づくにつれてその極端さは増していき、海岸線の側はほとんどソーラーパネルでした。調べてみると、震災後にすぐに営農を再開することが不可能だった土地を利用するために正式に処置されたものらしいです。波が及んだ範囲にソーラーパネルが広がっています。表面に空が反射したそれらは海のように見えたのを感じています。

プログラムが始まってすぐ感じた違和感は、他にもありました。

町の説明が全て過去形なのです。

「以前は賑やかな通りだった」「子供がたくさんいる図書館だった」「学校から帰ってきた高校生がここをたまり場にしていた」「ここには大きな公園があった」

今は、もう全て、ないのでした。それらは全て、もう十四年も人が足を踏み入れていない廃墟になるか、ソーラーパネルの海にのまれるかしていました。

まだプログラムが開始して一時間も経っていないのに、「あの『浪江』という言葉を、頭の中で反芻していたことを覚えています。

三泊四日のプログラムの中で、特に印象的だったフィールドワークが二つあります。

一つ目は、震災遺構である浪江町立請戸小学校の見学です。海岸線のすぐ近くに位置している請戸小学校は、校舎が大被害を受けながらも倒壊を免れ、さらには全校生徒が無事避難できた奇跡の学校として知られています。

崩れ落ちた壁や、反対方向まで転がった給食室の設備。崩壊した天井からは鉄骨の一部が吊り下がり、人がいたことがあるとは思えない風景でした。でも私はそれらを目にしても、なぜか恐怖や悲しさが湧き起こってきませ

んでした。事実として、なんて残酷な状態なのだろうと感じましたが、ぞっとする恐ろしさを感じる事ができなかつたのです。一緒に見学に行った同じ学校の人たちが絶句して周りを見渡す中、私は妙に冷静な気分でした。他の参加者と言葉を交わしながら、基本的に一人で校舎を回りました。目を潤ませた皆と一緒に話しながら歩くと、なんの涙も出てこない自分がみじめに感じてしまひそうだと思ったからです。

でも、ある教室に入った瞬間に、その渴ききつた思いは変わりました。

二〇一一年三月十一日の請戸小学校は、卒業式の準備に追われていたそうです。体育館の床は真つ二つに折れ、凹み、壇上には「卒業証書授与式」の看板が今にも落ちそうな体勢を保ってかかっていました。

私は高学年になってから小学校というものがあまり得意ではなくなり、小学校六年生の後半は特に休みがちでしたが、卒業が迫る期間の先生達の多忙な様子や、同級生達の高揚感がよく覚えています。そんな中、防災無線

が大津波警報の発令を知らせ、請戸小学校の生徒達は全員、自分が今まで何気なく触れてきたものを全て捨て、命を守るために逃げたのでしよう。

私がのぞいた教室の後ろのロッカーに、くしゃくしゃに丸まった給食の献立表と、なんだかよくわからないほどに汚れたファイルのようなものがありました。わざわざ覗き込んでよく見てみないと見つからないようなものでした。

小学生にとって、給食の献立表なんて別に大した価値がありません。小学校時代の私にとっては、それは見飽きて嫌になるくらい身近なものでした。でもこのプリントの持ち主は、給食の献立表といういわばなんの変哲もない「日常」から、津波と地震というものによって切り離され、さらに原発事故によって長い間日常に戻れない状況になってしまったのだらうと思いました。

そのプリントを見るまで、請戸小学校の遺構は私にとって「特に関係のない、残酷な風貌の建物」でしかありませんでした。私がここに通っていたわけではないし、

第一、ここに通っていた生徒は全員助かったのです。何  
も問題はないじゃないか、と心の底で思う自分がいま  
た。

でもプリントを見つけてからは、私は今自分がここに  
いることがとんでもない奇跡のように思えました。「今、  
被災したこの『元日常』のプリントを見ている瞬間とい  
うのは、たった一つの地震によって永遠に失われてしま  
うし、この瞬間に地震が起こる可能性もある」。そう考  
えると、地震に遭うまで「まさか地震なんて来るわけな  
いだろう」と思っていた小学生達のことを、まさにいま  
の自分ではないかと思いました。

教室を出ると、急に目に入るものが全てが恐ろしくなり  
ました。きつとかつては生徒達が触ったり、何か貼った  
り、ちよっと落書きしたり、喧嘩して頭をぶついたりし  
ていたであろう教室の扉が歪んで、原型を留めていな  
い形で教室の奥に張り付いていました。子供達の笑い声、  
泣き声と一緒になることで「日常」を生み出していた教  
室が壊れている様子は、日常の残骸にしか見えませんで

した。

「壊れた机」も、「崩れた壁」も、「砕けた扉」も、私  
にとって怖くはありません。でも、笑い声と泣き声と、  
その他様々な生徒の声を失った「日常の残骸」たちは、  
私にとってどうしようもなく怖いものでした。

神戸小学校の見学は、プログラムの最初に行われたも  
のでした。もし最初に小学校を見学していなければ、私  
の浜通りでの経験は、今抱えているものとは全く異なる  
ものになったと思います。そのメニューが提供されるこ  
とはなかった三月十一日以降の献立表は、私の視点と感  
じ方を百八〇度変えてくれました。

二つ目の経験は、三日目に行われた地元住民の方への  
ヒアリングです。この時訪れた施設は、東日本大震災・  
原子力災害伝承館。福島第一原子力発電所があった双葉  
町にある施設で、展示見学や語り部聴講を行っている場  
所でした。私たちはそこで女性の語り部の方の話を聴き、  
そのあと、道の駅なみえにて、行政に携わる方に話を聞  
きました。

両方の話の中で何度も聞いたのは「復興」という言葉です。

復興の意味を考える、というのは、災害にまつわるテーマとしては非常にありがちだと思います。しかしありがちなのはそれだけ重要だということで、被災者である語り部の方と、行政や政治に関わる方、二人の相対する考えを聞く中で、「復興」に対する様々な考え方があることを知りました。

例えば、暮らしに大きく関わる「復興」。

震災から十四年が経つ今も、浜通りの多くの地域で帰還困難区域が残っています。帰還困難区域とは、原則として立ち入りには許可と届出が必要になり、現時点で年間積算線量が五〇ミリシーベルトを超える区域のことです。つまり、生活インフラ等は未整備であり、住民が戻ることはできません。

福島第一原子力発電所の事故によって、急遽浜通りの多くの町には「全町避難」という対処が下されました。

ある日突然、家に帰れなくなり、家にあつた愛着のあ

るものは全て触れられなくなる。そしてその状況が十年以上続く。

まるで悪夢のようなそんなことが実際に起こったと考えると、被災者の方々の心情は想像し得ないどころか、想像することがむしろ失礼になるのではないかと思ってしまう。震災以前と同じ場所に、同じ家族で暮らすことが、確かに「復興」と言えるのかもしれませんが。

ただし、そんなことが起こり得るのでしょうか？十年経てば、家族編成は大きく変わります。当時小学生だった子供達は高校生、大学生に、高校生だった人たちはもうそれぞれの家庭を持っているかもしれません。もはや住めない地域となった自分の家に、そこまで愛着をもった子供達がいるのでしょうか。悍ましい津波と事故のせいで亡くなった家族の面影の残る家に、十四年経ってもなお戻りたい人がいるのでしょうか。現実的に考えて、ほとんど全ての住民が、将来浜通りに戻ってくると思いがたいと私は思います。酷なほど客観的な意見だとは思いますが、被災者ではない私だからこそ抱ける考え

ではないかと思いました。

語り部の方が考える「復興」は、主に家族や生活の話で、原発の心配をせずにまた十四年前のような生活に戻れることだということでした。その一方、道の駅で話を聞いた方の復興は少し異なり、政治面や経済面を他の市町村のレベルまで引き上げる、ということに重きを置いていました。

どちらも重要な「復興」であり、同時に、両者があってこそその「復興」だと、私は思いました。

しかし、他のメンバーの中には、「行政側の意見は酷だ」という意見を持つ人もいました。確かに、被災者がかつて暮らしていた土地を整備し、大規模な工場やソーラーパネルで埋め尽くすことは、少し残酷に思えます。約十年の間、放射線などによって住めない街になったとはいえ、自分がかつて暮らしていた場所に、営利目的で真四角な建物が建っていたら、誰だって胸が痛むでしょう。

でもそんな考えを更新させるように、一つの言葉が飛び込んできました。

「行政という人間はいない」

道の駅でお話を聞いた方の言葉です。行政とは人間ではなく、また立場でもありません。ただ、「行政」という、使いやすい箱だけを見て、私たちはその箱の中身を見ていなかったのです。それと同じことが、「被災者」にも言えることに気がつきました。「被災者」という人間はいないのです。

思えば、この世には多くの異なる粒をひっくるめて呼ぶ便利な言葉がたくさんあります。私は「中学生」「女の子」「子ども」「不登校児」といった、時に私に向けられることがある、個々を見ようともせず一般化する言葉が嫌いでした。でも、浜通りで様々な話を聞いたことで、自分がそれに等しい言葉を無意識に使っていることに気がつきました。そしてそれによって、「中学生」「不登校児」と呼ばれたときの私のような、苦さを味わう人がいることも知りました。

私は言葉が大好きです。言い表すことができないはずの感情や情景を、あえて言葉に表す、小説家や文筆家と

いった職業に憧れます。しかし、表現できないはずのたくさんの人々、事象を文字にしなければならぬその職業に、嫌悪感を抱くこともあります。私が抱くこの感情を、あの人が抱いたその絶望を、なぜ「他の人に伝える」ために、解像度をあえて下げて言葉にしなければならぬのかと思う時があります。「行政という人間はいない」という言葉を聞いた時、自分がそれまで思っていた葛藤が綺麗に言語化されたようで、とてもすっきりしました。「言語化したくない葛藤」を「言語化してもらった」とことで、言葉の好きなどころと嫌いなところをいっぺんに味わったような気がしました。

私がなぜ今まで、社会の教科書の「東日本大震災」の説明が好きではなかったのか、感動することも恐ろしくなることもなかったのか、「行政という人間はいない」という言葉のおかげで分かったような気がしました。

解像度が低いのです。できるだけ抽象化し、その「被災者」や「悲しみ」や「行政」などの言葉に含まれる雑多な部分を全て排除しているのです。教科書のせいで、

とは言いませんが、私は「東日本大震災」と「原子力発電所事故」を、歴史上の「点」だと捉えていました。他に影響することのない、たった一つの点だと捉えて、それを暗記するだけでした。実際に足を運び、話を聞き、抽象化され排除された雑多な部分を全て、全身で感じることによって、その深さを知ることができました。今まで点だと思っていたものは、私にも、私のこれからにも、全て繋がっていたのです。

「復興」も、「被災者」「行政」と同じです。「復興を目指す」と掲げていたとしても、それを掲げる全ての人間の中で、復興した状態の景色は違うはずです。自分の中の「復興」と、現実のギャップに真摯に向き合い、十年以上、そしてこれからも、言語化を試み続ける福島の人々の姿を知りました。

浜通りに行ってから、私は自分のものの見方がずいぶん変わったなと感じます。

一年前、一緒に行ったメンバーや連携先の大人と話す

中で、自分が十二年という短い人生の中で経験してきた、私にとっては数の多い出来事が思い起こされました。自分が崩れた壁を食べようとしていた、東日本大震災に直接関係のあるエピソードから、自分の小学校生活の中であった出来事など、直接関係のないエピソードまで、私の中の引き出しという引き出しが勢揃いして、浜通りでの経験を吸収しようと頑張っていました。

いつか、叶えたいことがあります。

浜通りで過ごし、見て、聞いた四日間の経験が、私の中に一つの引き出しとして加わり、いつか私が大人になって表現者として仕事をする時、その作品の材料となることです。

私が好きな作品に「GASSHOW」という曲があります。東日本大震災を題材にした歌で、歌詞にはそれを想起させる表現がたくさん出てきます。この曲を聴いて、そしてこの曲についてのコメントを読んで、東日本大震災が日本の人々に、そして日本の表現者にどんなに甚大な影響を与えたのかわかりました。震災から十四年たった

今でも、その影響を咀嚼し続け、自分の表現に落とし込もうと努力し続ける人がいることを知りました。

今の私には、浜通りでの経験と原発事故、東日本大震災の事実はあまりにも大きくて、今こうして稚拙な文章でノンフィクションとして記すことしかできません。ただ、自分が感じたことをそのまま言葉にすることしかできないため、言語化して解像度が下がることによって、私が経験した現実よりもぼんやりとしたものになってしまいます。いつか、浜通りでの経験が自分の一部として馴染み、引き出しの一つになった時、それを使って誰かに衝撃を与えられる作品を生み出したいです。浜通りでの経験を超越するような、事実を超越する感動をもたらす作品をつくり、そこに浜通りでの経験や、東日本大震災、原発事故のことを色濃く落とし込みたいのです。

できるだけ多くの人に、浜通りを訪れてほしいと強く思います。道を歩くだけで、真四角で妙に新しい建物や、海のように広がるソーラーパネル、古いものが何も見つかからない通りなど、さまざまな違和感があります。その

違和感は、ニュースや報道では全て捨てられ、私たちに届かない部分です。自分で取りに行かないときっと一生触れることのない感動と、恐怖と、その他言葉を奪われるような感情が存在することを、私は浜通りで知ることができました。東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が、恐怖とぼんやりとした不安を与えるだけのものではないことを、どうにかして世界に教えたいと思います。そのために、私は東日本大震災を経験していない最初の世代として、これからも浜通りを忘れずに生きていきたいです。



中学生の部

優秀賞

## 祖母の葬式

藤女子中学校 三年

### 前田 海音

ある夏の朝、祖母が亡くなった。

祖母は約一年前から頻繁に入退院を繰り返していた。持病のコントロールが加齢とともに上手くいかない節もあったようだが、生きていく上でのやるせなさが身体症状として現れてしまう顛末としての社会的入院という側面もあるようではあった。夜毎母と伯父が電話をしていたのは知っていた。「またやったよ。」「わかった、明日

仕事の後行ってみる。」「無理するな。」「わかってる。しかしどうしようね、そろそろ本当にどうにかしないと。」「2025年8月9日、母や父、兄はそれぞれ出勤や登校の準備をしていた。私はその時山中湖の合宿に出掛けており、以下は父母と兄から聞いた内容になる。7時、伯父から母に着信。「病棟から連絡きたんだけど、どうも心臓の動きが弱いらしい。病院向かってくれる？」母はわかったといい、父は「ここからだ」と30分くらいかかるから、俺が運転するわ。それぞれ職場に遅刻の連絡しとこ。」と話して母と父は祖母の入院する病院へ向かった。車が走り出して15分ほどで伯父から再び着信。「今心停止して心臓マッサージ中なんだけど、どうする。」母は父にどうしようねと持ちかけ、父は「心マやめてもらっていいわ。後10分くらいで着くから。」と伯父に伝えた。母は電話を切った後すぐ職場のボスに「あの、母が亡くなったので申し訳ないですが当欠させていただきます。」と連絡したらしい。父も道連れの職場に出勤の連絡をした。病室に到着すると呆然とした伯父と祖

父が病室におり、気管内挿管をされた祖母がいた。部屋の心電図モニターは何の数字も表示していなかった。8時8分。医師が心拍停止、呼吸停止、瞳孔散大、対光反射停止を確認した。母はその時、ああ、本当についに。と思ったと言う。

祖父は「何しろかわいそうでしょう、俺より早くこんなことになるなんてよう。」と繰り返して、伯父はひたすら流涙していた。別室での当直医からの説明では、臨牀的に説明がつかない予期せぬ死亡であり、家族の希望があれば病理解剖を、という打診がされた。母は祖父と兄に、私の一存で話させてもらってもいいか。と尋ね、頷く二人を確認したのち医師に「解剖は希望しません。本人、もう生きるの精一杯でした。このまま連れて帰ります。本当にありがとうございます。」と言った。

病室に戻ると母は祖父と伯父に一度家に帰るように告げた。母は伯父に「葬儀について何か祖母から意向を託されているか？」と確認したが、伯父はわからないとのこと。ではその件も一存してもらっていいか。都度連絡

するから電話だけは出られるようにしてほしいと念を押した。二人が退席した後母は祖母の亡骸の枕元で実家から一番近い葬儀場に電話をかけた。ワンちゃん互助会入ってたらラッキーだって。と母が問い合わせたところ加入していることがわかり、母は葬儀を申し込み、遺体搬送車の手配をした。車が来るのは2時間後。母は実家に電話をし、「葬儀プランは直葬（通夜や告別式と行った宗教儀礼を省略し火葬のみで故人を見送る形式）、遺体の安置は家ではなく葬儀社へ、火葬は明日葬儀社と時間は相談しよう。互助会の会員証と、遺影の写真用意して、後（祖父の）親戚に連絡しといてもらえるとありがたい。」と伝えた。

一通りの連絡や病院との事務手続きなどが終わり、母は改めて横たわる祖母に向き直った。本当にひたすら寝てるみたいでさ。毎日毎日眠剤飲んで寝られないって言うってたじゃない、ようやく寝れて良かったよねえ。て思ったと母は言う。窓から見える景色は快晴の夏の日で、「やあ今日も暑そうだなあ、とか普通に考えてた。こん

な大ごとが起きてても人間って丈夫なもんだなあ、って思ったよ。」と。

遺体搬送車が到着し、専用の通用門から祖母とともに病院を出る。病院のベッド、ストレッチャーからの搬送車への移動は病院スタッフや葬儀社の方が行うが、その日は土曜日でスタッフも手薄だったため父が都度手伝った。婿に最後抱えてもらえるなんてよかったねえ、と母は笑ったそうだが多分母以外誰も笑ってない。搬送車を見送り、母と父も病院を後にした。

「こんなことになるとは予想外すぎたね流石に。」

「いやでもまあねえ。十一時か、昼ごはんどうする。そばでもさつと食べる?」

「あ、駐車場いっぱいだよ。やーもう家でそうめんでもぱつと食べよう。(兄にも) 伝えなきゃだしさ。あ、(父の) ご両親にも連絡して?びっくりさせちゃうねえ。」

家につき、兄に祖母の死を伝えると兄は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしたらしい。初孫で待望の男児だった兄は祖母の愛情を一身に受けた。祖母は伯父も含め、

男児に思い入れが深かった。特に私を妊娠中母は管理入院が必要で、その間もまた生まれた後も入院加療が必要だったため兄はしばらくの間昼は保育園、夜は祖母に養育された。それだけに兄も祖母への思いはひとしおだったことは想像に難くない。

喪服を用意し、葬儀場に向かう。祖父母の住む家から2分ほどの葬儀場の一部屋に祖母は安置されていた。家族以外誰もいないその部屋はあまりにも広く、居心地は良くなかったと兄はいう。母の職場や友人、父の職場から供花が届き、少し場が華やいだ。兄は棺が見えた途端涙が溢れたという。その姿に祖父も伯父もまた泣いた。そして兄は祖母の亡骸に向かい、やをら

「旭川、きてね」と言った。

伯父は涙を流しながらも、旭川って何。ここ札幌。甥は旭川観光大使か何かを目指しているのか?と混乱したらしい。兄曰く自分を愛してくれた祖母に、自分が夢を叶える決意表明、すなわち北海道旭川市にある大学に合格してみせるよ、と伝えたい思いが溢れたらしいのだが、

あまりに言葉たらずで唐突な兄の発言は葬儀場の空気をおかしなものにし、父母は失笑したという。祖父は今でもあれは訳わからなかったよな！と言う。兄には受験を頑張っしてほしい。落ちた場合、祖母は彷徨える魂になってしまふ。旭川わざわざ来たのにいないしょや。と怒る祖母の声が聞こえそうだ。

葬儀場の人と葬儀プランの確認や支払いなどをする隙間で母は区役所に手続きに行く。土曜なので休日窓口でのやり取りであった。

人が亡くなるとこんなに書類を書くものとは知らなんだ。と母は言った。医師に死亡診断書を作成してもらい、まずはコピーを何部かとっておく。死亡診断書とセットの死亡届に必要な事項を記入し、役所に提出。同時に火葬許可証を提出、火葬許可証を受け取る。国民健康保険資格喪失届や介護保険資格喪失届も必要だ。人が死ぬということは、このような社会の仕組みからひとつずつ痕跡を消していくことなのかもしれない。では残るのは記憶だけなのだろうか。

母は書類を携え斎場へ戻る。次は火葬場の予約だ。札幌市火葬場予約システムで火葬空き照会を行うのだが、母曰くまるでホットペッパービューティーじゃないかと驚いたらしい。○、は空きあり。△は残り2枠以下。×は空きなし。希望日と希望火葬到着時間をクリックして予約完了。死後24時間を経過した時点で火葬は可能になるため(墓地、埋葬に関する法律第三条)、8時8分に亡くなった祖母は朝一番の9時30分の枠が予約可能だった。母はなんでも一番が好きな人だったからそれでいい。と即断だった。火葬の時間が決まるということでは祖母の肉体とお別れする具体的なカウントダウンが始まるということだ。母はなぜこうもビジネスライクにサクサク決めるのだろうか。次に新聞の訃報欄に掲載するか、誰に連絡するかなどを決めていく。お悔やみ欄、という訃報のお知らせに掲載する欄は北海道独特のものらしい。結論、家族葬という事で掲載はしなかった。喪主は祖父で。と母は斎場の方へ伝えた。打ち合わせや判断、意見の取りまとめが喪主の役割とするなら実際は母が担

っているのだが、そこは祖父に任せることにした。祖父はちんまりと齋場の座布団に座り、眠そうにしている。

そうこうしていると祖父父母の住むマンションの住人の方々が弔問に訪れてくれた。昨日ゴミ捨ててたじゃないねえ、挨拶いつも通りしてたじゃないねえ。と皆驚きを隠せない様子だった。ねえ本当に。驚かせてすみません。と母は繰り返した。

気がつくとい日は落ち、齋場近くの回転寿司でテイクアウトした寿司を皆で食べた。こんなことがあってお腹も空かなければ何を食べても味気ないのかもしれないと思っていただけ、腹は減るし寿司は美味しかったと兄は言った。人間とは弱くて強くて卑しくて愛おしいものだなあ、と思う。祖父と伯父が寝ずの番をすることになり、父母と兄は一旦自宅に帰った。寝ずの番、には故人の安否確認、悪霊からの保護（安心して極楽浄土に向かえるように）、故人との最後の時間、という意味があるらしい。線香や蝋燭を絶やさないように見守る。母は祖父と伯父によりしくね、といい、祖母の亡骸にはまた明日来ます

んで、と挨拶した。

合宿を終え、山中湖から千葉にある父の実家に着いた夜、私は母から祖母の死を伝えられた。信じられない気持ちで聞き、そして明日火葬してしまうことにも驚いた。気をつけて帰っておいで、と言う母の声はいつもと変わらなくて、私は混乱した。父方の祖父父母は明らかに私に気を遣っていたし、私も祖父父母の前で泣くのは何か違うと思った。夕食を済ませ、疲れたからお風呂に入って早く寝るね。と伝え、風呂の中でシャワーを出しながら誰にも聞こえないように泣いた。祖母ともう会えないのが悲しいのか、今年になって会いに行かなかった自分を責めているのか、よくわからないけどいつまでも涙が出た。そのとき、なぜか祖母が「筒に入ったポテトチップスは」凹んでいる側に味付けされてるからそちら側を舌に乗せて食べなさい。」と教えてくれたことを思い出し、涙は少し止まった。

翌朝7時30分、父母と兄は齋場に到着した。9時30分の火葬に間に合うには8時過ぎには齋場を出発

(出棺) しなければならぬ。兄は父母の喪服姿を初めてみた。二人ともスーツを着る仕事ではないため見慣れない格好だ。喪服には亡き人を悼み、派手な行動を慎むという意味があるという。母は自分を見つめる兄に気がつき、「何。海街(Jenny)の長澤まさみかと思っただか。」と言いつつ放った。不謹慎にも程がある。祖母の棺に花や写真を入れる。燃えるもの以外は御法度だ。曾祖母が嘗み母も手伝っていた食堂(店名はおデブ食堂。理由は曾祖母が太っていたから。大正生まれの自虐風味ネーミングセンスに脱帽。)の手ぬぐいも入れた。普段持ち歩いてきた巾着袋や帽子も入れた。棺に蓋をすると、もうここからは故人様のお顔を見ることはできません、お別れです。と斎場の人は言った。兄も伯父もずっと泣いていた。祖父は疲れていた。母はここまで、一粒の涙も流してはいない。棺をのせたバンが走り出した。

火葬場に到着。火葬炉の前に棺は安置され、最後の焼香をした。棺が火葬炉に納まると、伯父が聞いたこともない声で泣いた。母は兄に大体二時間後にアナウンスが

あるから。それまで控室いこ。あんたそこで数学やんなさいよこの限界受験生が。と言った。兄が父に見張られながら控室で勉強していた時、伯父と母がそつと控室を出た。祖父はあいつらなんだろう、俺に聞かせられない話してんのか。と訝しんだ。

伯父と母はラウンジにいた。

「週末のフェスどうする 初七日だけど」

「いやあ、(祖母は)ポルノグラフィティ好きだったから、弔いのためには行かないと」

「そうだね、じゃ行くってことで。」

確かに祖父に聞かせられない話である。

アナウンスがあり、骨上げが始まる。遺骨を見て母が「長く患ってるからもう私の骨なんてポロポロよ。きつと火葬した骨の形残んないわ：って言ってたけど！この大腿骨見てよ！やー見事だわ！」と大笑いしていた。

その立派な大腿骨は骨壺から見事にニョッキリとはみ出してた。足から順に拾い、最後に喉仏を収める。棒で骨は崩され、祖母は小さく、小さくなった。さあ、家

に1日ぶりに帰るよ。母が骨董に話しかけた。

翌日帰札した私はその足で祖父母の家に向かった。祖父母の家は普段と何も変わらず、祖母が途中まで記入していた宅配サービスの注文票もそのままだった。あ、それ解約しないと。と母は言った。あら来たの。と祖母がどこからか現れそうに思えた。

食卓に、一冊のノートがあった。私はそれを読んでしまった。そこには母への辛辣な言葉が羅列されていた。多くは母から実家への経済的な援助への不満に関する記述。祖母の字だった。最初の方は端正だった字が、どんどん乱れていく。内容もそれに比例するように読んでいて苦しいものになっていった。私は何を見てしまったのか。顔色を失った私に気づいた伯父が、ああ、見ちゃったか。と言った。ごめんおじさんが悪い。しまっておくべきだった。と詫言った。母はいいよ別に。知らなくていいことなんてこの世にないから。でもびびくりしたしよ。と言った。祖父は黙っていた。

帰りの車でどうしても我慢できず、どうして、いつか

ら、と私は繰り返した。ええと、どこから話せばいいかな。母は運転しながら話し始めた。

祖母は未熟児で生まれ、曾祖母は育てる自信がないと高祖母により育てられたという。その後弟が生まれ、曾祖父と家族四人で暮らすようになるも、曾祖母は結核にかり入院を余儀なくされ、再び高祖母と暮らす。進学を希望するも経済的な問題でそれは叶えられず就職、その後祖父と結婚し伯父と母をもうけた。

「生まれ変わったら全然違う人生にするんだ。結婚もしないし、子供も産まないで。」

祖母はよくこう言ったという。

あなたはいつも私がこうしなさいと言ったことと反対のことをするね。

母は物心ついた頃から、いつも祖母にこう言われたらしい。

「まあ私もめんこいタイプじゃなかったからねえ。夜泣きはする、偏食、大体機嫌が悪い。で、(伯父)とは全く逆で育てにくかったらしい。まずそこでうまくいかな

かった。」

育てにくい、ってよくわからないけれど、私なんて生まれた時から病気で手がかかっただろうに、やっぱり両親を苦しめているのだろうか？と私は怖くなった。私のこともそう思ったことある？と母に問うと、あーそれはない。と即答で少し安堵した。

「裕福ではなかったから、高校は職業学科に行くようになって（祖母）は言ったんだけど、私反抗してね。中三の時、担任の先生に奨学金申請について教えてもらって、高校から大学まで給付も貸与も受けてありがたいことに進学できた。私、あらゆる意味でここから出て行かなくて、何にすれば自活できるか。で決めた。何しろ、私は運が良かったから、周りに恵まれて、助けられて今ここ。でも母は自分が叶えられなかったことを私が叶えていくのがもしかしたら受け入れられなかった。面白くなかった。」

「そこも含めて育ててもらった感謝はあったから、私も

できるだけ恩返しをしようとしたし、してきたつもりだった。でも私が小五の時からちよっと厄介な病気にかかって、入退院を繰り返して少しずつ色々バランスが崩れて。多分生きていく菌痒さとかもちろん治療に伴う副作用とか体調の悪さでそのキツさを私に向けるのがちょうど良かったんじゃないかね。娘ならではの気やすさみたいのはあったんじゃないかな。そのうち認知機能の問題も年齢相応に出てきて、私も受け止めるのが辛くなって少しずつ少しずつ距離を置くようになったよね。」

「お金のことが、私への不満か、自分の体調が悪いことしか話題にならなくなって、電話もラインも本当に辛くてね。時々たまらなくてブロックして、やっぱり後めたくて解除しての繰り返し。でも、最後の引越しては新しい住所も教えなかった。私の身の回りの嬉しかったことを分かち合えなくなったことが一番辛かったかな。妬ましい、みたいな気持ち先立つようになってきてね。で、私はいいけど、あなたたちを傷つけることだけは避けなきゃ。て。決定的だったのは、あなたの病気のことを、

『うちのまきじゃないけどね。(まきとは血脈につながる親族を指す)』て言われたこと。悲しいっていうか、ああもう分かり合えない。この子をこういう価値観に晒しちゃいけないって思った。(伯父)は全部わかって、私は自分自身と自分の家族を守ってくればいいって、自分が世話や連絡を一手に引き受けて、盾になってくれたんだわ。ほんと感謝してもしきれないよ。』

「死人に口なし、ってね。母が反論も抗議もできなくなつて、こんなことほんと話すつもりもなかった。もちろん、苦しいことばかりじゃなかったし思い出せる優しい思い出だって確かにあるんだよ。でも、少しずつお互いに小さいさよならを積み重ねてきて、距離ができて、とうとう(祖母は)亡くなった。今はね、忘れないから思い出さないからね。ゆっくり休んでね。って。ここ数年で一番穏やかな気持ちでいる。朝起きて、まず今日の祖母はどんなふうにあタックしてくるだろう、って毎日戦々恐々だったからさ。本当にあなたは本当にしっかりしてるよね、そういうところが可愛くないってよく言っ

てた。全然褒め言葉じゃないけどね。だから絶対葬儀とか色々、きちんとしますよって。もう意地だよ。やー終わった！って感じ。』

私は家に着くまで、何も言えなかった。親子だからいっただって分かり合えるわけじゃない。そんな現実を直視できなかった。私は両親はもちろん、家族から無条件で愛されていることを疑うこともなく十五年間生きてきた。自他共に認める甘えん坊だ。悲しいことも、嬉しいこともいっただって最初に話したのは家族で、家族だからこそその後ろめたさがある世界など想像したこともなかった。今家族の誰かが亡くなったり、二度と会えないということが起きたら。と考えるだけで涙が出てくるというのに。母が自立に向けて具体的に歩み始めたのも同じ十五歳だということが信じられなかった。そして母と祖母が私の前では互いに葛藤を抱えていることを悟らせないように振る舞っていたなんて。私はいったい何を見ていたのだろうかとも思った。

母はその後残務処理に追われ、あつという間に初七

日を迎えた。その日私と母と伯父は恒例の音楽フェスの会場にいた。受験生の兄は悔し涙を流しながら不参加。強風の中テントを立て、母と伯父はレモンサワーで水分補給を繰り返していた。全然ダメなパターンである。二泊三日に及ぶフェスは体力勝負だ。伯父と母は、丈夫な体に産んでくれたことに感謝だよね、と言った。「もう自由な体になったからさ、(祖母は)最前列で見てるんじゃない?」とも。誰かが亡くなっても。誰かが笑っても泣いても。世界は続き、どこかでライブは開催される。

このフェスでは最終日21時頃花火が打ち上げられる。今年も見られたねえ、と私たちは夜空を見上げて話す。母がレモンサワーを片手に誰に言うでもなく話し始める。何杯飲むんだろう。

「葬儀の色々ってねー大変ちゃ大変だったんだけど、事務的なことを色々しているとね、(祖母)を見送るための心の準備ができたんだよ。ちゃんとお別れするって、最大の礼儀だよ。葬儀システムって上手くできてる。でもね、できることなら、どんな葬式がいい?って聞いて

おければ良かったかな。生きてる時にね。

(祖母は)音楽が好きで ご飯を作るのが好きで お菓子を食べるのが好きで おしゃれが好きで デパートが好きで 片付けや掃除が大嫌いで 好き嫌いが激しくて 外面が良くて おせっかいで 涙もろくて 困っている人を放って置けなくて。

肉親との別れで、泣けない自分はおかしいのかな。って一瞬思ったけどあまりにも色々あったからしゃべらないよね。泣かないから悲しんでないわけでもないしさ。ただね、(祖母が)亡くなりました。って連絡をした人の何人かが「ずっと大変だったでしょ。頑張ったね。知ってたよ。」って言うってくれて、その時は泣くかもな、と思った。まあ泣かなかったけど。でもね、分かり合えない、って思うことは正直きつかったけど、それが家族の形として間違いだっただとも思わないんだよ。めんどくさいけど、そういう幸せもあるんじゃないかな。もう会えないけど 寂しいかと言われたらそうでもない。会いたくて震えるわけもない。でもね、今思うんだけど、ふ

とした自分の仕草とか、感情の動きとかにああ、自分の中に（祖母が）いるよなあ、て思うのさ。いいところも嫌などこも、実際割り切れないことばっかだけどそれくらいでちょうどいいんじゃないのかね。死んだら終わりののも格好いいのかもだけど、そんなにスッキリいなくなれないんじゃないのかね、死んでもさ。」

「もし（祖母に）また会えたらどうする？」と私は母に聞いた。

「や、元気にしてるの？つてぎこちなくね、言うと思う。ハグしたりとか絶対ないけどね。そしてぼちぼちやってくるよ、ありがとう。つて言えたらいいな。伝えたい言葉を後回しにしなければもしかしたら、私達もうちょっと上手くやれたんじゃないかなって思うんだ。それは心のこり。」と、母は言う。

「ノートのことさ。（父が）『あれ実際、本当はあなたのこと愛してたよ。とか書いてあったらそれはそれであなた落ち込むよ。最後まで最高のヒールでいてくれてむしろありがとうだよ。あなたの人生のギミック上、緊張

感高めてくれたっていうかさ。ラフファイトだったことは否めないけど、感情的に揺さぶられて、自分の人生どうにかしてやろうって動機にはなったでしょ？すごいパフォーマーだよ（祖母）は。』つて言ってくれてさ、なるほどなって思ったよ。なんでプロレスに例えるのかは疑問だけど。傷つかなかったとは言わないけど、私が決めることがあるとすれば自分を傷つけた論理を自分と似たような境遇の人に振りかざさないことかな。人生つてそれぞれ違う。それ忘れたくないなって。生きづらさの重さくらべをしたって楽になるわけじゃないもんね。だったら、それ重い？一緒に持つ？つて聞けるようになるたい。」

途切れない音楽とざわめきの中で母の独り言みたいな言葉を聞いていた。苦しみに意味を見出せたら、それはすでに救いなのだろう。大切な人との別れは、避けられずにいつもそこにある。だとすれば私は隣にいる人に恥ずかしがらずに、その都度思いを伝えたい。祖母が亡くなったという出来事は私に色々なことを気づかせてくれ

た。大切な人を大切にしたい。そう強く思った。

祖母が亡くなり初めての秋が通り過ぎ、もう冬になった。母は一日七千歩早歩きするだけで痩せるしコレステロールは下がるし認知症予防だってさ!と父を巻き込みウォーキングを継続中。しかし未だ特に体重に関し効果は出ていない。父は消費期限切れのサンドウィッチを食べて重い胃腸炎になり皆を呆れさせた。兄は祖母に約束した手前落ちるわけにはいかないと受験勉強に勤しむふりをしつつアイドルに現をぬかしている。祖父はデイサービスに通い穏やかな日々を送っている。現在ハマっているのは松屋の牛丼(味濃い)。伯父はアイドルのライブ参戦の合間に祖母の墓をどうするか模索中。私は部活内の人間関係に悩んだりライブ参戦したりどうしたら二重になるかなど悩みながら過ごしている。大体いつもと同じ毎日。しかし、いつもと同じに見えるところにいろんなものが隠れていて、実は変わらない風景がとても豊かだということを、祖母は教えてくれた。葬儀とは故人の死を周囲に知らせ、社会的な区切りをつける役割があ

るといふ。祖母の死や葬儀は一般的なものではなかったかもしれないけれど、私達残った家族が祖母を見送って、記憶に残すという意味深い出来事だった。死を悼むだけではなく、生きることを見つめることができたからだ。

思い通りにならない毎日こそ、誰かのせいにしたくない。毎日自分で選んで、積み重ねたものを信じて生きていきたい。一度だけ、祖母が「私何もしてやれないけど。死ぬときには、あなたの病氣持って行くからね。」と言ったことがあった。そんな何気ない一言が、ずっと心に生き続けることもある。私が皆に愛されているように、皆誰かに愛されている。母と祖母にも二人にしかわかない、通い合うものがあったからこそ、母は祖母の葬儀などの諸々を遂行することができたのだろう。揺るぎもない、完璧なものしか信じられないなんて窮屈だ。色々矛盾していても、自分らしく世間の風をいなしながら生きればいいじゃない、と家族は私に教えてくれる。辛い時、苦しい時、寂しい時、そっと寄りかかれるものは確かにそこにある。死という特別はことではないが生を揺

さぶるものに対し、大袈裟に恐れるでも悟りを開くでもなく（そもそもできない）人は足並みを揃え、向き合うことができる。十五歳の夏、私はそれを知った。

そして私は心に決める。これからの日々、兄も一緒にたびたび父母に確認しよう。今日夕飯何食べる？くらいの軽さで聞こう。できれば私は気負わず、大切なことを話し合える、そんな家族でいたいと願う。ぶつかってもいい、いろんなことを話そう。もしもの話は不吉な話ではなく、家族の安心を守る前向きな準備なのだから。

「ねえ、どんなお葬式にする？」



## あさのあつこ賞

### おおきいおうち

渋谷区立原宿外苑中学校 二年

谷藤 緑

『ちいさいおうち』という絵本を知っていますか。

主人公の「ちいさいおうち」は、最初自然豊かな田舎に建てられますが、おうちのまわりは時代とともに開発が進み、やがて自然は消え都会になっていきます。僕はこの絵本を小学校2年生のときに読んでからずっと大好きで、ときどき思い出したら家や街について考えます。

この作文の主人公「おおきいおうち」は、まったく逆

です。もともとにぎやかな街の中に建てられましたが、時代が進むにつれだんだん人が減っていき、おうちのまわりはどんどん静かにさびしくなっています。今では右隣は空き地、左隣は一人暮らし、向かいも空き家です。「おおきいおうち」は立派な洋館で、大正時代、1913年に建てられました。僕のじいじ（祖父）のひいおじいさんが建てたそうです。じいじもママもこの「おおきいおうち」で育ちました。

●「おおきいおうち」が建ったところ

一枚の古い写真が残っています。大きな洋館が建てられた頃の写真です。まわりは江戸時代からの和の建物です。江戸時代の町屋の特徴だという瓦葺きの庇、出格子の窓が並んでいます。昔ながらの和の町の中で、真新しい洋館はひときわ目立っています。道はまだ土ですが、電柱はもう建っています。大きい車輪のついた台車のよななものに荷物を乗せて運んでいる人が何人もいます。

じいじに聞くと、「馬は大きくて町の中には入れんし、馬がうんこをしたら大変じゃけん、町の中では人が荷馬車を運ぶんじゃ」と言っていました。運んでいる人も、お店の前に立っている人も、みんなはつびのようなものを着ています。はつびを着て、サングラスのようなものをかけている人もいます。江戸時代からの古いものと新しい西洋のものが、混じり合っている時代なんだなと感じます。何より、たくさんの人が行き交っていて、にぎやかな雰囲気伝わってきます。

今の町の静かな様子とまったく違うので、びっくりします。今は、人が住んでいるか空き家かわからない静かな家が多く、ところどころ本当の空き家や空き地もあり、お店のような建物もだいたい真っ暗で営業している様子はありません。わずかにカフェが2軒開いているのと材木屋さんと看板屋さんと木工屋さんくらい。車は通りますが、人はほとんど歩いていません。今日は町全部がお休みなのかなと思っちゃうくらいです。でも、夏休みに行っても、年末に行っても、秋に行っても、いつも人はい

ません。

いつからこんなに変わってしまったのか、じいじとママに昭和と平成の町の様子を聞いてみることにしました。僕が13歳の2025年（令和7年）の様子と、ママが13歳だった1991年（平成3年）、じいじが13歳だった1960年（昭和35年）のそれぞれの町の様子を比較して、どのように町が変わっていったかを調べてみました。

おおきいおうちの前の通りは、「出雲街道」と呼ばれ古くからある道です。出雲から姫路まで続く道で、江戸時代には参勤交代にも使われたそうです。

おおきいおうちは津山城の東側の中之町という町にあります。中之町は、江戸時代には466人も人が住んでいたという記録も残っていて、ずいぶん栄えていたようです。商人の町でさまざまなお店があったそうです。おおきいおうちも金物屋さんをやっていました。金物屋さんというのは、ノコギリやお鍋、クワやカマなどさまざまな金属製のものをお店だそうです。江戸時代の

寛政の改革の頃から200年以上続きました。

中之町を含む城東地区は、古い商家の町並みが残っているの、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されています。

●1960年、昭和35年、じいじ13歳

じいじが生まれたのは、1947年5月29日、戦争が終わって約2年の頃です。ベビーブームの真っ最中で、この年は約268万人の赤ちゃんが生まれました。ちなみに僕が生まれた2011年の出生数は約105万人で半分以下です。

1960年、じいじ13歳。高度経済成長期のど真ん中です。その頃の町の様子をじいじに聞きました。

中之町は出雲街道に沿った町で、約250メートルの道の両側に家々が並んでいます。じいじが13歳の頃は、その250メートルくらいの間に、八百屋さんが3軒、魚屋さんが2軒、精肉店が2軒、散髪屋さんが2軒、ク

リーニング店が2軒、お薬屋さんが2軒、消防団、郵便局、駐在所があったそうです。長くなりますが、他にも、はんこ屋さん、駄菓子屋さん、酒屋さん、造り酒屋、金物屋さん（じいじの家）、お好み焼き屋さん、染め物屋さん、お寿司屋さん、文房具屋さん、洋裁店、ボロ屋さん（廃品回収）、自転車屋さん、たばこ屋さん、仏具屋さん、製紙加工店、材木店、種苗店、大工さん、織物店、麴屋さん、とさまざまなお店があったそうです。

僕はびっくりしました。今の町と違って、40軒近くもお店があったんだ。昭和の時代になっても、江戸時代の商人の町だった名残が残っていたのかな。

金物屋さんとかボロ屋さん、染め物屋さん、洋裁店など今はあまり聞かないお店もいろいろあります。スーパーとかショッピングモールと違って、ひとつひとつの種類のを売るお店。いま僕たちがお買い物をするときは、スーパーに行けば、野菜もお魚もお肉もお酒も全部、一つのお店で買うことができるけれど、昔のお店はそれぞれ一つの種類のものを売っていたのです。「専門店」

と聞くと、高級なお肉を売っていると、珍しい魚や特別な農家で作った野菜を売っているようなお店が思い浮かびます。しかし、じいじに聞いてみると、これらのお店は特別なものを売っているわけではなく、スーパーで売っているような日常のものを、別々のお店で売っていたようです。町全体で、ショッピングモールの屋外バージョンみたいな感じだなと思いました。

じいじによると、「人通りはけっこうあった」ようです。車はまだ普及していなくて、学校に行く人も通るし、通勤の人も通るし、買い物で歩いている人もいます。荷馬車はもう通ってなくて、じいじの家にも金物屋さんの仕事で使うトラックはあったけど、まだ乗用車はなかったから、いつも歩いてきたそうです。じいじのおじいさんは、運転免許を持っていなくて、アメリカ製の自転車に乗って、お客さんのところに集金に行っていたそうです。

毎日の買い物は、だいたい町内で済ませていて、ときどき橋を渡ってお城の近くの商店街に行っていたそうです。じいじの学校もお城の下にあって、そこに毎日通っ

ていたそうです。

お店屋さんがなくなるってことはあまりなくて、逆に新しいお店がどんどんできたそうです。じいじがもった小さい頃は、町にはお肉屋さんがなく、お城のそばの商店街まで自転車に乗って、買いに行っていたそうです。でも、13歳の頃には同じ町内にお肉さんが2軒もできていました。他にも、鉄板焼き屋さんを始めたたり、菓子屋さんを始めたたりする人もいたそうです。この頃は、中之町の町に活気があったんだと感じます。

ただ、その少し後、じいじの家の金物屋さんは、少し郊外寄りの広いところに移転して、中之町は家だけになりました。

● 1991年、平成3年、ママ13歳

そして、1978年5月31日にママが生まれました。ママは毎日、町のお店でお菓子を買っていて、お菓子を食えずぎて虫歯だらけになってしまったそうです。1歳

の誕生日に、まだ髪の毛も生えていないのに、もうケーキを食べている写真もあります。そのケーキも、中之町ではないけど歩いていける近所のケーキ屋さんで買ったものだそうです。

ママが13歳の頃の町には、製紙店、大工さん、材木店、麴屋さん、はんこ屋さん、仏具店、クリーニング店、洋裁店、廃品回収店、歯科材料・機器店（元薬屋さん）、コンビニ（元酒屋さん）、スーパー（造り酒屋だったところ）、牛乳屋さん（元青果店）などのお店があったそうです。今と比べるとお店がけっこういっぱいあったんだなという感じですが、それでも、じいじが子どもの頃に比べると半分以下です。

ママが小さい頃、ママのママは普段は近所でお買い物をして、週に何回か自転車や車で少し離れたところにある大きなスーパーにも行っていたそうです。でも、ママは毎日、近所の駄菓子屋さんや八百屋さんでお菓子を買っていたそうです。近所のお店に一人でおつかいに行くこともありました。

ところが、あることが起こります。この頃、町にスーパーマーケットやコンビニができるのです。とくにスーパーができたことは大事件でした。

「スーパーなんかできたら、うちのお店は太刀打ちできない」

スーパーができる少し前、ママが八百屋さんにお買い物に行くとお店の人にこう言われたそうです。

そして、その言葉の通り、スーパーやコンビニができたのに入れ替わるかのように、八百屋さんや駄菓子屋さんは商売をやめてしまいました。ママも、毎日のお菓子をスーパーやコンビニで買うようになりました。

しかし、驚くことに、そのスーパーももうありません。1997年ごろに閉店したそうで、10年くらいしかなかったということになります。こんなことなら、八百屋さんもやめなくてよかったのに。

ただ、駄菓子屋さんがなくなった原因はスーパーやコンビニのせいだけではないかもしれません。子どもの数が少なくて、ママが小学校を卒業すると、町全体で小学

生が5人くらいしかいなかったそうです。もう少子化が始まっていたのでしょうか。

●町の人口の変遷

中之町の人口の推移を調べてみることにしました。2025年現在は、40世帯で87人です。いまの静かな町の様子を考えると、80人以上も人がいたんだと驚きです。

しかし、津山の最も古い記録『改帳』によると、元禄10年（1697年）の中之町の戸数は47軒で、人口は466人となっているそうです。江戸時代のこの頃の日本全体の人口は約3000万人だったそうなので、現在の日本の人口に置き換えると1800人以上になることになり、中之町の人口はすく多いと思います。津山藩は大きな藩ではないので、もっと人口の多い藩や町も他にたくさんあったと考えられます。江戸時代も幕府のある江戸に人口35万人と集中していましたが、その頃は

まだ地方にも多くの人っていて、それぞれに栄えていたんだと感じます。

その後、『津山松平領の人口』という資料によると、天保3年（1832年）214人、天保6年（1835年）256人、弘化3年（1846年）271人、嘉永5年（1852年）262人、安政5年（1858年）300人。天保の大飢饉の頃に200人台に減りますが、その後また増えてほしい300人前後で推移しています。明治時代に書かれた『美作国津山誌』という資料によると、明治に入った1880年（明治16年）は、戸数が80戸、人口は325人と記録されているそうです。ところが、ママが13歳だった1991年には、80世帯で270人に減りました。その後、天保の飢饉の後のようにまた増えることはなく、さっきも書いたとおり、僕が13歳の現在2025年は、40世帯で80人にも減ってしまっています。

じいじが13歳だった1960年は記録がなくわかりません。そこで、じいじに、どれくらいだったと思うか、

推測を聞いてみました。すると「僕の頃も、りさちゃん（ママのこと）の頃と、変わらんじやろ」と言うのですが、そんなはずはないんじゃないかと僕は思います。どう考えても、300人以上いたのではないか。

### ●1960年の謎

僕なりに整理して推測してみることになります。まず、じいじの1960年とママの1991年を比べると、お店の数が半分以下に減っています。世帯数は、明治時代だった1880年と1991年、どちらも同じ80世帯なので、1960年も同じくらいの可能性はあります。ただ、ママによると、ママの子ども時代は、おじいさんやおばあさんだけが住んでいて子どものいない家が多く、子どもの数が少なかったそうです。

じいじの家族の人数の変遷、じいじの家の右隣・左隣・お向かいの人数の変遷を比べてみることにしました。

1960年のじいじ家は12人（じいじの祖父母、じ

いじの父母、じいじを入れて4人の子ども、じいじの叔父・叔母、住み込みの従業員さん2人）。

1991年は8人（ママの祖父母、ママの父母、ママを入れて4人の子ども）。

2025年、じいじは一人暮らしです。じいじの両親が死んで、妻（ママのママ）も死んで、4人の子どもは僕のママも含め今は全員東京に住んでいます。

さらに、隣近所（右隣・左隣・お向かい）の人数も調べました。

2025年、じいじ家の右隣は空き地、左隣は一人暮らし、お向かいには空き家。合計1人。

1991年、右隣は高齢の夫婦、左隣も高齢の夫婦、お向かいには駄菓子屋さんのおばあさん1人。合計5人。

1960年、右隣は2家族5人と6人で計11人（夫婦・子ども3人、おばあさん・夫婦・子ども3人）、左隣は高齢夫婦2人、お向かいの駄菓子屋さんは4人（夫婦・子ども2人）。合計17人。

じいじとじいじのまわりの家・計4軒の合計だけを比

べても、1960年は29人で、1991年13人の約2倍、単純な数でもプラス16人です。こういうことから推測すると、じいじが13歳の頃の中の町には300人くらいはいたのではないのでしょうか。

それにしても、すごい減り方です。1960年29人↓1991年13人↓2025年2人と、30年で半減し、65年で約15分の1まで減ってしまっているのです。じいじの家だけでも、1960年12人↓1991年8人↓2025年1人、しかも4人の子どもは全員東京に。

少子高齢化とか東京一極集中とよくニュースなどで取り上げられますが、まさにこれがその典型的なあらわれです。昔は栄えていた町が、どんどん人が減り、子どもはいなくなり、空き家や空き地だらけになってしまふ。中之町だけでなく、日本全国でこういうことが起きています。

中之町は「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されていて、町並みや建物の保存・修復に国などから支援が

あるので、まだましかもしれません。もっとほったらかしにされている地域もたくさんあるのではないか。

●町は生きている

僕の好きな『ちいさいおうち』。小学生の頃、主人公の「おうち」に顔があるように見えて、おうちが生きているみたいなのところが好きだった。「おうち」でみんなが楽しく暮らしていると「おうち」も楽しそうだったし、「おうち」に誰も住まなくなり、まわりがどんどん開発されて息苦しくなったときは悲しそうだった。

家も町も生きものだ。「おおきいおうち」と町の歴史を調べて、そう思った。家も町も、人間と同じように、年をとって、古くなったり、元気がなくなったり、する。人間や動物、植物は自然と土に還っていくけれど、建物や町はそうはいかない。何もしないと、ボロボロのまま、ただほっとかれることになる。

でも、大正時代に建てられた「おおきいおうち」は、

建てたじいじのひいおじいさんが死んでも、じいじのおじいさんや、じいじのおとうさんが死んでも、まだ生きています。

じいじもママもこのおうちで育ったし、おばあちゃんもは死ぬ前じいじと一緒にこのおうちでカフェをやったくさんの人が来てくれたそうです。今も、すぐくたまに、このおうちで、ギャラリーのように作品の展示をしてあげられることもあります。この前、東京から友だちを連れて行ったら、友だちも喜んでくれた。僕が古い木のピアノを弾いて友だちが歌うと、じいじも変なリズムで手を叩いて喜んでいた。

大事に使えば、建物は人間よりずっと長生きだ。

全国で空き家が問題になっていて、取り壊しもされています。やみくもに壊さないで、家や町の特徴を活かして、修繕していくのがいいのではないかと僕は思います。「ちいさいおうち」が、絵本の最後、都会から別のいなか引越して、また元気を取り戻したように、やり方によっては、家も町もまた息を吹き返して、きっと元気が

を取り戻すことができる。僕はそう思います。

#### 参考資料

『出雲街道第八巻 津山（橋本町・林田町・勝間田町・

中之町）』小谷善守

津山市オープンデータポータル「dataeye」



中学生の部  
選考委員特別賞  
**最相葉月賞**

「ちがいが」を乗り越える歌の力  
　　↓ 美しいハーモニー創りを  
　　教わった児童合唱団での八年間↓

アメリカン・スクール・イン・ジャパン 三年

ドーソン ソフィー和奉江

「ワン、ツー、スリー、フォー！」  
手拍子と共に振付の先生の声が響く。

紺のプリーツと白い袖がリズムに合わせて揺れながら、  
完璧に揃った足並みでステージに上がる。

ヒール付きの靴の振動がステージの床の上を走る。

一斉に足踏みが止まり、ピアノがなめらかなメロディー  
を奏で始めた。

スーッと息を吸う音。次の瞬間、一つの声になってホー  
ル中に響き渡る。

透き通った美しいハーモニー。

「トントントン」

譜面台を叩く指揮棒が上がり、今度は指揮者の先生の声

で

「頭からもう一回やってみよっか。」

「はい」と揃った返事の後、再び会場中がシーンとなる。

これは私が入っていた児童合唱団のリハーサル風景  
だ。まるで一人の人間が歌っているかのように、230  
名の団員一人ひとりの動きや息遣いが揃っている。ここ  
まで揃うには、夏の合宿も含め、日頃から盛りだくさん  
の練習をこなさなければならない。週2回合計約8時間  
の全体レッスンを始め、隔週のパート毎のレッスンやダ  
ンス集中レッスン。レッスン時間以外にも、日々の個人  
練習や、時には学年での自主練。さらに、レッスンやコ

ンサートをより実りあるものにするための話し合いもレッスンの合間に行われる。

これらの練習は、量が多いだけではない。先生方や先輩たちから求められる質の高さは、歌唱や振り付けだけではなく、礼儀や敬語の使い方にまで及ぶ。「ちゃんとお家で練習してきて！」「返事はしっかり！」お陰でこの合唱団は歌声の美しさだけでなく、礼儀正しくマナーが良いことでも評判だ。それらは六十年という歳月を掛けて築かれた伝統でもある。それだけに、日々のレッスンにはピツと引き締まった空気が漂い、コンサート前になるとプレッシャーがベールのように私たち団員に覆い被さる。

しかし、コンサート本番のカーテンコール後、客席の笑顔に手を振ってステージから舞台袖へと下りながら耳が痛くなるほどの拍手を浴びる時、「合唱をやって良かった！」と感じる。演奏者である私たちの達成感と聴衆の喜びや感動がコンサート会場中に一体となって渦巻く瞬間。「歌ってやっぱいいね！」みんなの気持ち

笑顔や拍手や時には涙から伝わってくる。「この瞬間のために、私たちは日々練習に励んでいるんだ。」年にたった二回のコンサート。そこで自分たちのベストを出し切れた時、肩の荷が降りた気がすると同時に、心からやり甲斐を感じる。それが、この六十年と言う長い年月の間に磨き上げられ続けた美しい歌声の伝統がある児童合唱団で歌うことの醍醐味だ。

この歴史と伝統ある児童合唱団を、私はこの春、「卒団」した。中三になった春、つまり、いわゆる受験生となるこの時期に、この児童合唱団では全員が現役団員としての活動に「卒団式」で一旦区切りをつけ、それと同時に退団するか継続するかを決断することになっている。十四歳の私たちにとっては人生初めての大きな分かれ道。続けるにしても辞めるにしても、簡単な選択ではない。悩みに悩んだ末、私は他の約半数の同級生と共に、退団の道を選んだ。

その卒団、そして退団から半年が経った今、この児童合唱団で過ごした八年間を振り返ってみたいと思う。ど

のように八年間を過ごし、何を感じ考え、そして、どのように八年間に終止符を打つ決断を下したのか。私にとつてあの密度の濃い八年間とは何だったのか。しっかりと言葉にして書き記すことで、あの児童合唱団での八年間を忘れないでいたい。また、あの八年間で学んだことをきちんと整理して、これからの人生でも活かしていきたい。そういう想いを込めて、八年間を振り返ってみてと思う。

私の児童合唱団人生は、ある日、気づいたら始まっていた。幼稚園生だったある日、少し暖かかったから三月初ごろだったと思う。母に連れられて電車に乗り、駅を出て少し歩くと、大きな子どもから小さな子どもまでたくさんの方が集っている場所に着いた。「ななえちゃん、こんにちは！」優しいそうなお姉さんに迎えられると同時に母から手が離れ、お姉さんに連れられて子供達の中に入ってしまった。少しドキドキしていると、「こんにちは！」と先生の渾刺とした声に続いてリズムカルなピアノが流

れ出し、一斉に子どもたちが元気な声で歌い出した。目の前に座って私の目に優しく微笑みながら歌を口ずさむお姉さんの口を一生懸命見て真似た。続いて手拍子に合わせて踊りが始まった。お姉さんに手を取られて、見様見真似で一緒に踊った。何分ぐらい経ったのだろう。「ななえちゃん、またね！」とお姉さんに手を振られ、誰かと話している母の手をまた握っていた。帰り道、「楽しかった？」と母に聞かれ、「うん」と答えると、翌週、小学校一年生の四月からこの児童合唱団に週2回、通うようになっていた。

小学校低学年のうちには、まだもらった楽譜の音符も歌詞の文字もまともに読めなかったが、大きなお兄さんお姉さんに手を引かれるがまま、まるで魔法にでもかかったかのように、音楽が聞こえてくると、口と体が自然と動くようになっていくのが不思議だった。そして、気がつくとステージで元気に歌って踊るのが楽しくて、観客から拍手を浴びたり両親や祖父母から褒められるのが嬉しくて、歌や踊りが生活の一部となっていった。

そんな頃、あのコロナウイルスの世界的大流行がやってきた。小学三年生が終わる頃だった。学校が閉鎖し政府が外出自粛を呼びかける中、児童合唱団のレッスンも中止を余儀なくされた。しかし、先生方や先輩方のお陰でほどなくしてオンラインレッスンが始まり、コロナでどこにも出かけられない中、画面越しではあっても、先生に声を掛けてもらえて、優しい先輩や仲の良い友だちの顔を見ながら慣れ親しんだ歌を歌って踊れる時間はこの上なく楽しみだった。

そして、小四の終わり頃にコロナが収まってくると、検温、マスク、除菌、室内換気、対人距離などに十分気をつけながら、対面少人数レッスンや無観客コンサートが徐々に再開された。マスクをつけたまま歌うのは正直しんどかったが、同じ場所で一緒に声を合わせられる喜びの方が大きかった。Zoomのスピーカー越しではない歌声を耳にした時、以前は当たり前だと思っていた「みんなで一緒に歌う」ことがどれだけ有り難いことなのかも思い知らされた。

小学校高学年になると、四部合唱への挑戦の時期を迎えた。今までは自分たちが歌うメロディーライン以外は大きなお兄さんお姉さんたちが後ろでしっかりと歌って支えてくれていたことに初めて気づくと同時に、今度は自分たち一人ひとりがソプラノやメゾなど異なるパートの旋律を奏でなければならないという責任感も感じ始めた。今まで耳にしていた先輩たちの旋律に比べてまだ声も細かったが、段々と同級生だけでそれぞれのパートに分かれて合唱できるようになっていくのが嬉しかった。

六年生になって、遂に、中学生以上大学生までいる上級生レッスンに参加する時期がやってきた。始めは緊張しながら先輩について行くだけで精一杯だったのが、徐々に、自分のパートの旋律をしっかりと歌いつつ、全体のハーモニーに耳を傾けられるようになっていった。しかし、上級生レッスンでは「歌で表現すること」「客席に感動を届けること」が求められ、初めて「合唱って難しいな」と感じた。それと同時に、今までのレッスンは本格的な合唱作りのための基礎となる土台形成期だっ

たのだと気付かされた。小さい頃のただ楽しくて褒められると嬉しかった頃が懐かしかったが、難しさを乗り越えることによって味わうジワーっとした深い喜びも嫌いではなかった。そして、それと同じ頃、音楽とは別の難しさが私の前に立ちはだかり始めた。

「ななえのパパって外人なんだよね？」

六年生になったある日、レッスンの合間に、突然、同級生から聞かれた。『外人』って『外国人』の略かな。」と、あまり気にせず、

「そうだよ。」

とだけ答え、別の話題に移った。

しかし、自宅に帰ってから、父に、

「パパって外人なの？」

と尋ねると、父は私にこう説明してくれた。

「『外人』という言葉はね、人を差別する言葉にもなるんだよ。『外人』という言葉は、文字通り『外の人』という意味で『よそ者』みたいに聞こえるから、そう呼ば

れるのが嫌な外国人もいるんだよ。だから、『外人』じゃなくて『外国人』と言った方がいいよね。」

私はこれを聞いてびっくりした。なぜあの子は私を差別したんだろう、と思いついでしまった。しかし、しばらくして、その子は全く私を差別する気があったわけではなかったことに気づいた。私自身も知らなかったように、その言葉の意味やニュアンスを知らなかっただけのことだったのだ。でも、その言葉によって誰かが悲しい気持ちになるなら、誰も使わないようになればいいのに、と思った。

その頃から少しずつ、小さい頃には全く感じていなかったことに気がつくようになり、私の心の中がザワザワし始めた。私と他の児童合唱団員の子たちの見た目の「ちがいが」や話す日本語の「ちがいが」。「私はアメリカ人と日本人のハーフで、純粋な日本人ではないんだ。」それまでは、私もみんなと同じくらい純粋な日本人に見えて、みんなと同じように日本語が話せると思っていたのだが、そうではなかった。ちがうと気づかれたくなくて

目立たないようにもしたが、隠れても完全に日本人の見  
た目にはなれないし、言語的にも文化的にも純粋な日本  
人と全く同じようになれないと分かり、自信をなくし始  
めた。私はただみんなと同じになりたかっただけなのに、  
なれないことは明らかで、それが理由で大好きな児童合  
唱団を辞めたいと言ったこともあった。私は「私の居場  
所はこの合唱団ではないのではないか。」と悩み始めて  
いた。(大きくなってから聞いて驚いたのだが、私は母  
に「私も日本人のように、黒い髪と黒い目になりたい。」  
と時々言っていたそうだ。その度に母はいつも「そのま  
まのなちゃんがママが一番好きよ」と言ってくれてい  
たそうだ。)

そして、小学校の終わり頃、「好きな歌を、自分の気  
持ちをもっと乗せられる英語でも歌いたい」と母に話し、  
英語での歌のレッスンを開始した。また、中一の終わり  
には、児童合唱団で紹介された大阪万博のテーマソング  
を日本語で歌うオーディションにも応募した。結果は通  
らなかったのだが、これがきっかけで、提出音源の歌唱

力を指揮者や監修の先生が褒めてくださり、歌に自信を  
持ち始めた。「私でもできるっていうことも。」そう思  
い直し、児童合唱団のレッスンでもっと努力する様にな  
った。さらに、個人でも英語の歌で応募する外部オーデ  
ィションに応募し始めた。一次選考は通ったものの、こ  
ちらも結果的には通らなかったのだが、歌を歌い続け  
たと言おう気持ちは益々強くなってきた。

児童合唱団以外のところで様々な挑戦を重ねているう  
ちに、児童合唱団内でも以前よりも自信を持って歌える  
ようになってきて、同じパートの先輩に褒められること  
も多くなってきた。そして、中二になった時、やっと児  
童合唱団のコンサートの選抜メンバーだけのステージに  
立つことができ、プロミュージシャンとの共演メンバ  
ーにも選ばれ始めた。そして、遂に、中二の夏に、児童合  
唱団の夏期恒例演奏旅行メンバーに選ばれた!「今まで  
コツコツとがんばっていることが認められた!」そのこ  
とが一番嬉しかった。「私の居場所はこの児童合唱団に  
もあるのかもしれない。」いろいろな自分の外見や言葉

が同級生とちがうことについて悩み始めた六年生以降で一番晴れやかな日だった。

それでも、学年が上がるにつれて、私自身の中では自分と児童合唱団の仲間たちとの「ちがいが」についてもつと意識するようになった。「通っている学校や家庭環境がちがうのだから、流行、音楽、趣味、話題がちがって当たり前だよね。」と半ば、理解してもらえなくてもいいかな、と諦めかけていた。

しかし、その頃、嬉しい変化が起き始めた。同級生の中に、「ななえちゃん、合唱団でしか日本語で話さないのにすごいね」と言ってくれる子が現れたり、「ねえねえ、今、ななえの学校で流行っていること教えて！」と興味を示してくれる子も現れた。今までは、「自分は自分の得意じゃない方の言語でがんばって話しているのに、相手はいつも自分の得意な言語で話していて対等じゃないな」「いつもなんで私だけが相手に合わせなきゃいけないの」とイライラしてしまうことも正直あった。だからこそ、私の言語や文化に同級生が興味を持って近づい

て来てくれた時は本当に嬉しくて、レッスン以外の日にも一緒に出かけたりするようにもなり始めた。そして、話し合いの場で正直に「私、実は日本語で話すのが苦手なんだ」と自分の方から自分の弱いところをさらけ出せるようになり、何かが変わり始めた。そして、自分の中で日本人らしさとアメリカ人らしさ、日本語と英語、日本文化とアメリカ文化のバランスを、合唱団にいる時でも、上手く取れるようになって来始めた。

この児童合唱団が、創立して間もない頃から60年以上の歴史を誇る伝統行事、それが夏の演奏旅行だ。日本全国で志を同じくする児童合唱団が交流し、合同で練習し、コンサートステージで共演する。地方公演の間、私が所属していた児童合唱団員は、地方児童合唱団員のご家庭のご好意で民泊をさせていただく。感謝してもし切れないほどありがたい体験をさせていただける、年に一度の特別な機会である。

先述のように、私は児童合唱団内外でのたくさんの挑

戦や出演を経て、ようやく、中二の春、その年の演奏旅行メンバーに選ばれた。昨年の春のことだ。だが、最初にお知らせを受け取った時、私は「なんで私が選ばれたの？」と信じられなかった。しかし、先生はこう仰ってくださいました。「歌も踊りもどちらも大事なんだけど、特にななえちゃんには歌が上手だから選ばれたんだよ。指揮者の先生の一推しだって聞いたよ。最初はななえちゃん、出演とか演奏旅行、大丈夫かなって思ったんだけど、ななえちゃんなら大丈夫だから、もっと上達していくように頑張ってるね。歌を頑張ってるうちに、踊りもついて来るから、まずは歌でもっと表現してみようね。先輩たちは、ななえちゃんが演奏旅行に来ることをとっても楽しみにしているよ。」監修の先生からのこのメッセージは私に自信と希望と勇氣、そして、「もっと合唱をがんばろう！」と思うきっかけを与えてくれた。出発の約二ヶ月前から、通常レッスン後に夜遅くまで、演奏旅行メンバー用の延長練習があったが、モチベーションが最高潮に達している私には全く苦にならなかった。

しかし、その一方で、普段、様々な面で両親に頼ってばかりいる私が、九泊十日もの長い間、自分で自分のことを全てしながら、家族以外の人たちと一緒に過ごすことができるのか、と、不安が募り始めた。初めて会う地方合唱団員のお家での民泊中、マナーや礼儀の面で失礼せず、同泊の先輩に迷惑を掛けずに過ごせるのか。体調管理をしっかりと自分でできるのか。さらに、今回の旅行の一番の目的である連日の公演で失敗せず笑顔で終演を迎えることができるのか。東京を出発する日が刻一刻と近づくにつれて行くのが怖くなり、行きたくないときえ思うほどだった。

いよいよ出発の朝が来た。吉祥寺から羽田空港へ向かうバスの中では同級生たちと一緒に気が紛れたが、羽田空港に着いた途端、心臓の心拍数がドクドクと上がっていったのを今でもはっきりと覚えている。しかし、羽田空港を離陸すると、もう覚悟は決まっていた。

最初の目的地は、大分県津久見市だった。山と海に囲まれた長閑な環境の中で活動している児童合唱団との共

演だ。民泊先の地元合唱団員が、「指揮の先生が近所に住んでるから、時々、散歩途中で偶然先生に会って一緒に散歩することもあるんだよ。」と話すのを聞いて、心がポツと温かくなった。この児童合唱団員はお互いの家が近く、町内会の活動の延長のような感じで児童合唱団の活動があるのかもしれないと思った。私の所属する児童合唱団は都会にあるため、散歩途中に先生や先輩にたまたま会うということは想像ができなかった。「同じ児童合唱団といっても住んでいる地域によって雰囲気随分違うんだな。」児童合唱団に八年間も所属していたのに、初めて、地方児童合唱団との「ちがい」について考える機会となり、視野が広がった気がした。

次の目的地は山口県下関市だった。下関の地元児童合唱団員の民泊先は街の中心から車で結構離れた場所にあったため、津久見よりもっと広範囲のあちこちから車やバスで通っている団員が多いのかもしれないと思った。私たちが下関から出発する朝、地元合唱団員とその家族の方々が見送りに来てくれた。一緒に記念撮影をし、

民泊先団員と家族とお別れをした後、バスが出発した。すると、日本の児童合唱団員なら知らない人はいないくらい有名な『歌はともだち』という名曲が窓の外から聞こえてきて、胸が熱くなった。急いで窓を開け、バスの中から私たちが涙を堪えながらそれぞれのパートを一緒に歌い始める。朝9時過ぎのまだ静かな下関市民会館の駐車場と側道に止まったバスから二部合唱の歌声が響き渡る。信号が青になり、私たちのバスからは段々と地元合唱団の歌声が遠ざかって行ったが、私の耳の奥ではまだその歌の続きが鳴っていた。(実は、退団後に、この様子を下関市民会館の駐車場で撮ったビデオを母から見せてもらい、私たちのバスが加速して遠くに見えなくなっても、地元児童合唱団員たちが『歌はともだち』を歌い続けてくれていたのを知って、涙が止まらなくなった。「普段練習している場所は遠く離れていても、私たちは歌でつながっているんだ」と歌の力と下関の児童合唱団員たちのおもてなしの心に感動し、胸が熱くなった。)

三日目は公演がなかったため、夕方のフェリー出発時

刻まで、一日中、朝は海響館、午後はスペースL A B Oなどの博物館を訪れ、下関や門司の観光を楽しむことができた。二公演続きで全団員疲れ切っていたので、かわいいペンギンに癒され、静かなプラネタリウムでのんびり過ごし、リフレッシュすることができたのは、ラッキーだった。

プラネタリウムを出た時、私にとって、とても大きな発見があった。それは、先輩が私に「暗くて静かで落ち着く雰囲気だったから、すごく眠りそうになった」とイタズラっぽい笑顔で話しかけてきた時のことだった。周りにいる他の先輩や同級生たちも「うちも!」「同じ!」と次々に言っている。この瞬間、私は、「疲れて眠いのは私だけではなく、普段さちんとしていた先輩たちにも、私と同じように疲れを感じて思わず眠くなってしまうことがあるんだ」と知り、ほっと安心した。と言うのは、六年生になってからの私は、外見や日本語がいわゆる普通の日本人とちがうように、ハーフの自分のマナーや礼儀などもみんなのレベルに追いついていないのではない

かという劣等感をいつも感じていて、間違わないようにと気にしながら過ごしてきたからだ。マナーと礼儀正しいことで評判の高い伝統ある児童合唱団員でも、疲れれることもあれば居眠りしそうになってしまうこともある、という、今思えば人間として当たり前のことも、当時はそう思えないほど、私は「ちがう」と思われないうようにと敏感になっていたのかもしれない。そのプラネタリウムでのひとときは、「私もみんなと同じ」と思わせてくれるほっとする出来事だった。

下関の後、新門司港から大阪南港までフェリーで移動し、その後は岐阜県岐阜市、愛知県東海市、岐阜県土岐市の二県三都市をバスで巡り、無事に演奏旅行から帰京した。この十日間、一日二十四時間、三食と寝起きを共にしながら、同級生だけでなく先輩や先生方ともたくさんしゃべっていると同じ経験をすることで、前よりも親しくなれたことが嬉しかった。そして、今まで素晴らしい面だけしか見えていなかった先輩や同級生の人間らしい面が見え、自分だけがハーフだから違うのではない

いということが分かり、安心した。そのお陰で、話し合  
いや一対一で話す時にも勇氣を持って自分の意見を言え  
たり気持ちや伝えたりできるようになったし、より親し  
くなれた友だちや先輩には自分の悩みも相談できるよう  
になった。この演奏旅行から帰って来てから、合唱団の  
先輩や後輩など年齢の異なる団員たちともたくさんしゃ  
べれるようになり、前には話したことがない団員にも話  
しかけられるようにもなり、合唱団内での知り合いがど  
んどん増えていった。「自分がハーフだからみんなとち  
がうんだと思ってどこかで線を引いていたのは私自身だ  
ったのではないか」とも振り返り、私の学校で流行って  
いる音楽やファッションのことも普段の会話で話題  
にしてみるようになった。そうするうちに、「私は『ち  
がう』ではなく、この合唱団の中の仲間のひとりなん  
だ。だから、困った時には本当に誰にでも頼って良いん  
だな」とも思えるようになり、レッスン中にも心が穏や  
かになった。小六の頃からハーフの私が抱えていたみん  
などの「ちがいを」をやっと乗り越えることができたのは、

この演奏旅行のお陰だと思う。

また、演奏旅行先で地方児童合唱団員と一緒にレッ  
スンや交流会や共演をする中で、「自分が所属する児童合  
唱団のやり方だけが唯一無二のやり方なのではなく、別  
のやり方も存在するのだ」と視野も広がった。さらに、「初  
めて会った人たちと住む地域や文化習慣や話す方言など  
様々な「ちがいはあるけれど、それらの「ちがいに」に  
とらわれるのではなく、同じように感じる緊張感やプレ  
ッシャーを共に乗り越え、同じように大好きな歌を通し  
て一緒に素晴らしいステージを創ろうとする気持ちが大  
事なんだ」とも、この演奏旅行は私に教えてくれた。「目  
指すものが同じなら、『ちがいは乗り越えられる』と、  
私に「ちがいを」乗り越えて一緒に楽しむ自信をくれる  
きっかけもなった。「やっぱり私の居場所はこの児童  
合唱団にある！」という思いと共に、中二の演奏旅行三  
味の夏が終わった。

日本の中三には高校受験と言うものがある。そのため、

この児童合唱団では、中三になった四月の初めに卒団式があり、その後、OG団員として今まで通り、合唱団活動を継続するのか、それとも、退団をするのかを決断しなければならぬ。

中二の夏が終わり、十一月の六十周年記念演奏会が終わると、私の周りは早くも翌春の卒団に向けて様々な話が飛び交いザワザワし始めた。退団か継続かを決断しなければならぬ時期が数ヶ月後に迫って来ていたからだ。私はなるべく答えを先延ばしにしたくて話に加わらないようにしていたが、先輩や同級生から「ななえちゃんはどうするの?」と聞かれ始め、少し困っていた。

確かに、小六から中一ぐらいまでの合唱団での自分のアイデンティティに悩んだ時期、様々な努力や挑戦をしながら乗り越えて、児童合唱団の代表として外部コンサートへの出演メンバーや演奏旅行メンバーに選ばれるようになったと言う自負心はあり、継続したい気持ちはあった。でも、OG団員として続ける、ということは、今までのように先輩についているだけではダメで、

自らが先輩として後輩を引っ張って行かなければならぬ立場になるということだ。そう考えると、私には自信がなかった。なぜかと言うと、普段、合唱団では日本語だけで会話をしているから周りにはそれが普通に見えるかもしれないが、私は普段の生活で日本語を使うことはほとんどないため、英語でなら何不自由なく年相応に言いたいことを100%言える一方で、日本語になるとそうはいかないことを私自身が十分承知していたからだ。そのため、先輩や先輩が「大丈夫だよ。」と言ってくれるのはとてもありがたかったのだが、後輩に指示を出したりパート内の問題を解決したりできるほど、日本語力に自信を持てなかったのだ。

幸い、この合唱団では、OG団員に相談できる期間と機会がしっかりと設けられている。そのため、そのことを監修の先生に相談したところ、同時期に私と同じような悩みを抱えていた過去を持つ先輩への相談を勧められ、私と同じパートのリーダーだったので、相談してみることにした。するとその先輩は、「最初からできる人

はいないから、安心して。」と言ってくれた。それでも決断がつかず、再び監修の先生に面談をお願いしたところ、年の瀬が迫った最後の週末にもかかわらず、先生は私の話を聞く時間をとってくださった。そして、面談の日、「OGとしてちゃんと後輩に指示を出したりできるかが不安で自分の日本語に自信がない。」と伝えると、先生は「ななえちゃんだけでなく、他にも、日本語で話すのが苦手な子、意見を言うのが苦手な子、など先輩にもいろんな人がいて、みんな不安。だけど、誰かがやらなくちゃいけないから、みんな意見を言ったり、指示を出したりするようになる。もっと自信を持ってね。」OG団員になることを支持してくれる助言はとてもありがたかった。

しかし、もう一つ、迷いに迷う理由があった。学業と合唱団を両立できるかという不安だ。私の通うアメリカンスクール中等部は受験をしなくても附属の高等部に進級できるシステムなのだが、その高等部を卒業すると、大多数がアメリカの大学に出願する。私の兄もそうだった。

た。その時の必要提出書類が、九年级（日本の中三）から十二年生（日本の高三）までの高校四年間の全学期の成績表であるため、高校入学時から一学期たりとも気が抜けないのだ。大学入学試験という一発勝負がない代わりに高校入学時点からの全ての試験や提出物で一回でも気を抜いて試験や提出物で低い点数を取ると、もう挽回は効かず、希望の大学へは入れない。その上、アメリカの大学はスポーツや音楽やボランティアなどの学校の課外活動に参加して学校に貢献していたかどうかでも重要視される。忙しいOG団員の役割をしっかりと果たしながら、大学進学に直結する高校の成績を高く維持し、さらに、学校の課外活動に参加して学校に貢献するのは、私には難しいと思われた。

今までの十四年間の人生で、こんなに難しい決断を迫られたのは生まれて初めてだった。退団か継続か、どちらに決めるにしても、後悔しそうで怖かった。でも、後悔はしたくなかった。そのために、自分の心の声をよく聞かなければならなかった。先輩や先生からアドヴァイ

スを聞いた後も、自分が次の高校時代に何をしたいのか、どんな高校生活を送りたいのか、思いを巡らしてみたい。そうすると、見えてきた。この八年間、私は、自分と他の団員たちとの「ちがいが」を乗り越えて精一杯頑張りたい、自分が目標に定めたところにはまだ到達できて満足しているという気持ちに確信が持てた。(これについて、指揮の先生にも、最後の演奏会後にご挨拶に行くと、「他の先生に聞くまで、ななえちゃんがそういう環境にいて知らなかったんだけど、やり方も全然違う環境なのに、ななえちゃん、本当によくがんばりましたね。ななえちゃん歌上手だから、これからもがんばってね。」と認めていただき、嬉しかった。) だからこそ、次は、自分が興味を持っているいろいろなことにチャレンジしてみたいのだ。でも、大好きな歌はもちろん続けたい。でも今度は自分もつと自然に感情を乗せて表現できる言語で歌いたいのだ。そういうことが次第にはつきりと見えてきた時、高校の履修登録説明会があり、私の迷いに決着がついた。「私が自分の持っている力をもつと全力

で出し切れる場所は高校の合唱の授業かもしれない。それに、今まで児童合唱団に捧げてきた時間で、今までにやったことがないことにトライしてみたい。」八年前に児童合唱団の体験レッスンに私を連れて行った母は、私のお話をじっくり聞いてから、「自分でよく考えて決めて偉いね。一回の人生、何でもトライしてごらん。」と言って、履修登録書と退団届にサインをしてくれた。そして、私は高校の合唱の授業の中でもチェンバー・シンガーズ(室内合唱団)という、より経験豊富なアンサンブルグループに入るためのオーディションを受けて、入ることができた。

「山の向こうに何かがあるかは、その山を越えた人にか見えません。」

半年前に退団した児童合唱団の監修の先生が、今年四月の卒団を控え、退団か継続かを迷っている私たち当時の中二団員に向けて仰った言葉だ。私は、その児童合唱団では「卒団」という「山」は登り切った。それが、半

年前の私にできるベストだった。

先週末、退団後、生まれて初めて観客席側からステージを眺め、コンサートを鑑賞した。前日、「自分がいないステージを見て、どんな気持ちになるだろう」「ステージで歌う団員たちのことを羨ましいと思うのだろうか」「退団したことを後悔するのだろうか」と、いろいろと考えているうちに眠ってしまったが、当日は少しドキドキしながら会場へ向かった。第一部と第二部を見ている最中、「もしかしたら私にももっとできたかも」などと思いつながら見ていたのだが、第三部になり、以前よりもさらにレベルアップした歌と演技を見て、自分が下した決断に納得し、後悔していない自分に安堵した。それと同時に、卒団後も継続して頑張っている先輩や同級生たちを心から尊敬し、「私も自分の決めた道へ、『山』へ、がんばろう!」と、エネルギーが湧いてきた。

私は今、今年の八月の九年生への進級と同時に履修し始めたチェンバー・シンガーズ（室内合唱団）の「山」を一生懸命に登っている。一日置きに七五分ある授業に、

様々なスキルの歌好きが集い、グループで協力して一つの目標に向かって成長・向上することに重きを置いて、楽しみながら練習し、美しいハーモニーを創り出そうと励んでいる。その中で、私自身は、个性的に自分を表現することでもっと歌に自信が持てるようになったし、間違ふことを恐れず、また、レッスン中にオープンに意見が言えるようにもなれた気がする。動きがピシッと揃う児童合唱団と対照的ではあるものの、楽しみながら、年に二回あるコンサートで客席に感動を届けると言う目標を掲げ、その目標に向かって練習に励む気持ちは全く同じだ。だからこそ、私は、毎回の授業で、自分が児童合唱団の八年間で培ったものの中で、チェンバー・シンガーズの成長にとって貢献できそうなものはメンバーと共有し、より良い合唱にしようとして試みている。

また、それとは別に、自分自身の新たな可能性を探るために、学内コンサートでのソロの挑戦や、インターナショナルスクールが合同で開催する国内外の合唱祭オーディションへの応募や、個人でも外部のオーディション

に挑戦し続けている。

そして、つい先日、あるオーディションの嬉しい結果が二つ、届いた。一つは、来春、都内のインターナショナルスクールが合同で主催するKPASS (Kanto Plain Association of Secondary Schools) の合唱コンサートに学校代表として出演することが決まったこと、そして、もう一つは、こちらも来春、韓国の濟州島にあるインターナショナルスクールで行われるAMIS (Association for Music in International Schools) と言う、アジアにあるインターナショナルスクールで選ばれた生徒たちが集まって一緒に歌う合唱コンサートに学校代表として選ばれたことだ。

自分の世界が広くなればなるほど、様々な「ちがい」がある人と出会う機会はもっと増え、越えていかなければならない「山」はもっと多く、高くなるだろう。あの西日本各地の児童合唱団と共に共演した演奏旅行もそうだった。来春のKPASSやAMISの合同レッスン会場やコンサートステージでは、正に、アジアの多種多様な

国々から集う生徒がもたらす言語や文化の「ちがい」が千差万別に入り混じり、お祭り騒ぎとなるかもしれない。でも、日本各地の地方合唱団と共演する演奏旅行に選ばれた経験を持つ私には怖くはない。KPASSや特にAMISの「ちがい」は日本国内で経験したそれよりも遙かに大きいだろうが、その時にこそ、八年間の児童合唱団で自他の「ちがい」を乗り越えながら培った合唱の基礎基本や醍醐味を同じステージ上の仲間と共有して大きな「山」を一緒に乗り越え、一つの美しいハーモニー作りに貢献したいと思う。先日の児童合唱団コンサートで、お世話になった監修の先生に、来春のAMISの参加のことを伝えると、「合唱団の時から歌上手だったもんね！リーダーシップを発揮して、児童合唱団で教わったことをどんどん教えて引っ張って行っちゃいなよ！」と言われた。この先生のお言葉にはいつも、自信と希望と勇氣、そして、「もっと合唱をがんばろう！」というやる気をいただく。伝統的な日本の合唱団では日本語に自信が持たなくて発揮できなかったリーダーシップを、今度はこ

のAMISで自信を持って發揮したいと思っている。

最後に、私が物心つく前から自分のアイデンティティを確立できるまで、この児童合唱団に所属し、日本の伝統文化や価値観に浸りながら、仲間と共に歌う機会を得られたことは、合唱団の一員として成長する上でも、また、人間として成長する上でも、非常に貴重な経験だったと思う。

歌には、二人だけの歌声であれ、二百人も合唱であれ、人と人、そして多くの人々の間に絆を生み出すような強いパワーがあると私は信じている。音楽を通じて、私たちは、自分一人がどういう存在なのかを表現できるだけでなく、他の多くの人々と一緒に歌うことで、外見や背景、価値観や信念の違いを超えて、私たちと言うまとまりで一体感を生み出すこともできる。私の場合、音楽の力のおかげで、出会った多くの人々と、人としての個人のちがいは敢えて目をつむり、私たち全員が目指す共通の目標——私たちをつなげる音楽を一緒に創る

こと——に向かって、切磋琢磨しながら共に成長することができた。

幼くしてこの児童合唱団に入団した時には、私は自分と他の子どもたちがどうちがうのか、例えば、他の子どもたちはみんな純粋な日本人であるのに対し、自分はハーフだということに、全く気づいていなかった。しかし、成長するにつれて、そうした自分と他の子どもたちのちがいに気づき始めた。そして、私が純粋な日本人ではなく、日本の学校に通ったことがなく、育った環境や経験が根本的に異なっているために、同年代の日本人の子どもたちと共有共感できないことがよくあり、「ちがう」ということに、ある種の不安感や劣等感を抱くようになった。

しかし、今の自分へと成長する中で、私はとても大切なことに気がついた。見た目がちがったり、他の子どもたちとはちがう経験をしたりしてきたからといって、私にはできることがないとか能力が限られていると言うわけではないと言うことを。それ以来、私がいつも自分に

言い聞かせてきたことは、目立つことは決して悪いことではないということだ。むしろ、そのちがいがこそが、日米ハーフとしての私の今日のアイデンティティの確立を助け、私に本当の自分を受け入れる勇気を与えてくれたのだ。

みんなと「ちがう」という挑戦を私に突きつけたのも児童合唱団の仲間だったが、私がアイデンティティの悩みを乗り越えるきっかけを与えてくれたのも児童合唱団の仲間だった。私とみんなとは「ちがう」ということに否定的な意味をくつつけるのではなく、同じでないことに不安感や劣等感を抱いてしまう気持ちを乗り越える場を提供し、ちがう自分はちがうままでいいんだとアイデンティティを確立する勇気を与えてくれたのも児童合唱団だった。

児童合唱団が八年の間に私に与えてくれたものは限らないが、その中でも、一番感謝したいのは、『「ちがいを乗り越えて、一緒に楽しみながら、美しいハーモニーを創り出すこと」を教えてくれたことだ。今、こうして、

あの児童合唱団への深い感謝の念と穏やかな気持ちでの体験記を書き終えられることに幸せを感じる。児童合唱団の先生方、先輩方、同級生たち、後輩たち、どうもありがとうございました。そして、これからも大好きな歌で「ちがう」人々とつながり成長していくんだという私の強い決意の気持ちを、この児童合唱団で歌った大好きな歌のうち、私の心にいつも響いているサウンド・オブ・ミュージックの曲に中山知子氏の歌詞を乗せた合唱団定番の歌で表して、終わりたいと思う。

「山を越えて行こうよ 登る道は険しくても

山を越えて行こうよ 虹の橋を渡ろうよ

愛の旗を掲げながら生きてゆけば 敵はいない

山を越えて行こうよ 空の虹を渡ろうよ

愛の旗を掲げながら生きてゆけば 敵はいない

山を越えて行こうよ 信じて探そう憧れを」



中学生の部  
選考委員特別賞

## リリー・フランキー賞

### 海辺の白花

昭和薬科大学附属中学校 二年

新垣 結菜

夏になると海辺には白い花が咲く。キラキラと水面煌めく海と、燦々と降り注ぐ太陽を浴び、白い花弁が自然の青々とした木々の中で一際浮いている。そんな景色が好きだった。私が小学二年生の二月頃、当時は新型コロナウイルスが猛威を振るっており、外出するにも制限がかかっていた。

そんな時、母は遊び盛りのこの時期に外に出られない

のは不憫に思ったのかよく近所の海のある公園へと連れて行ってくれた。海辺でよく遊んでいた私はコロナで友人とは交流ができないけれど、代わりに幼いながらに植物や気温の変化を感じて育っていった。

半年が経った。季節は冬から夏へ移り変わったが相も変わらず世の中はコロナ禍で、友達とは遊べなかったものの、私は飽きもせず海で遊んだ。

花も陽の熱気で萎れる八月初旬のこと。頭上からは太陽が容赦なく肌を灼く中、いつものように海へと向かっていた。が、なんの気無しにブランコに乗りたくなり、ブランコで遊ぶことにした。ブランコで遊んでいる途中あることに気づいた。

視界の端に茶色い何かがあるのだ。何かは少しも動かず、興味本位で近づいてみると案外小さく、ここで初めて仔猫だと認識した。白い花の咲く夾竹桃の木の下のことだった。

仔猫にはまだへその緒がついており、死体のように動かない。私はもう死んでしまっているのだろうかと思いき

のまま、またブランコに戻ろうとした。が、鳴き声が聞こえ振り返ると動いていた。その時の私は見つけた手前、良心の呵責に苛まれたのが幼い頭でも理解できた。さすがに見捨てたらだめだろう、と。

仔猫を見つけて十分後。放置するのは良くないのでひとまず仔猫の汚れた体毛を水道で洗う。仔猫はまだ警戒をしてはいるものの概ね懐いてきた。透き通った水道水を五分ほどあてていると違和感に気付いた。泥で薄汚れていた毛が洗われ、本来の艶やかな白色が取り戻される。そう、白猫だったのだ。

仔猫を見つけて一時間後。よたよたとアスファルトの上を歩く仔猫を見ると段々と愛着というものが湧いた。幸い家にはペットは金魚しかない。交渉次第ではこの仔猫が飼えるかもしれない。そうやって一人で有頂天になっていた。これがペットへのあこがれなのか、はたまた弱々しい仔猫を見た庇護欲といった類のものだったのかはよくわからなかった。

仔猫を見つけて二時間後。家に帰ろうと呼びかける母

に今日あった事を話した。

死にかけの仔猫がいたこと。それを見捨てきれなかったこと。だからペットにして家で飼いたいこと。無理なら誕生日プレゼントの権利を使ってでもいい。母は、「その仔猫を家で飼う前に公園で世話をして、私の誕生日まで育てれば誕生日プレゼントとして飼っていい」と言う。正直なところ正気の沙汰かと思った。公園で野良に餌をあげてはいけないと看板に書いてあったし、死にかけの動物を今すぐ保護しないなんて選択肢としてあり得ないと思ったからだ。ただうれしくもあった。自信があったのだ。誕生日まであと十日しかない。ならば仔猫の世話をしっかりして母を納得させて家で飼うことができる。と、小学生の謎の失敗を恐れない自信で。公園には薄暗く夕日に照らされたシロツメクサが群をなしていた。

仔猫を見つけて二日後。家で保護するべく公園へお世話に向かう。気温は日に日に高くなる一方で、仔猫も発見時と比べ衰弱していった。世話にはまだ慣れず。びち

やびちゃにしてしまったり、エサが残されていたりなど苦戦をしていた。

仔猫を見つけて五日後。気温は三十度を超え本格的に暑くなってきたころ。もう慣れて前と変わらず水をあげて、体を洗う。

仔猫を見つけて七日後。陽射しで海が煌めいていた。仔猫の世話の合間に久しぶりに海へ行った。このところ仔猫の世話で行ってなかったので海辺に漂う磯の香りが新鮮に感じられた。仔猫は相変わらず弱々しいままだ。体力もないのだろう。

仔猫を見つけて十日後。この日は台風が近づいてきていた。天候が悪くなってきており、未だかろうじて雨が降っていない。そんな天気だった。母もさすがに十日間もお世話している私に思うことがあったのか誕生日まで後二日あったが、保護してもいいと言った。ついに、ついに、飼うことができるのかと、とてもうれしかった。ウキウキの気分の中公園へと向かう。公園についたころには、ぽつぽつと雨が降ってきていた。仔猫をいつもの

場所へ迎えに行くと、なぜかいない。公園を散歩しているのかと思いい公園を探してみる。そうすると仔猫が大きなお兄さんたちに抱きかかえられていた。かといって許す可ももらえただに飼えないなんて嫌すぎたので声をかけてみる。「すみません、その猫ってどうなりますか？」答える。「保健所に連れていく」。「私にその猫くれませんか?」。「でも君この猫、ねえw」。私はここであきらめてしまった。保健所が何かわからなかったので幸せになるのならいいかとおもったのだ。帰り際に後ろを振り返ると雨が降り始め、海辺では高潮で萎れた白花が砂浜に散らばっていた。そして落ち込んだまま家に帰り母に事情を話し、その日はそのまま寝てしまった。母は何も言わなかった。

翌日調べると保健所では期限を過ぎると動物は殺処分されるのだと。窓の外では台風の影響で雨が打ち付けていた。仔猫を期限内に連れ出すことはもう不可能だった。仔猫を見つけて五年たった。公園も整備され、夾竹桃の木はもうない。あのころと比べて無邪気に遊ぶことは

なくなり、中学受験の影響で私は海に行かなくなった。  
家に帰るのも十九時半を過ぎるのは当たり前になった。  
八月の帰り道。坂の上から日が暮れて薄暗い濃紺の空に  
月が浮かんでいる。海は空を吸い込む様な黒を映し、空  
の月をまた浮かべている。



# 小学生の部

## 受賞作品



### 大賞

ひいおばあちゃんの忘れられない人

鈴木 愛渚 東京都 東洋英和女学院小学校 5年

### 優秀賞

自転車に乗って

石渡 雄晨 東京都 杉並区立新泉和泉小学校 6年

思春期センパイ

藤井 晴子 福岡県 北九州市立日明小学校 5年

### 選考委員特別賞

あさの あつこ賞  
水はこわい

下伊豆 芽依 京都府 京都市立明徳小学校 5年

最相葉月賞  
ぼくは野球がうまくない

小出 大伍吉 宮城県 聖ドミニコ学院小学校 5年

リリー・フランキー賞  
パパがいない

アラン・カーナ (ペンネーム) 東京都 2年

## 最終候補作品

お父さんの弱点 若狭 早 愛媛県 2年

エゾオオカミに出会うまで 谷藤 杏 東京都 5年

学問へすゝめ 能美 にな 福岡県 6年

天国のじーじとコマンドS 小林 花音 神奈川県 2年

オオグソクムシEAT 早川 智久 東京都 1年

歯科矯正術 ～無理やり引っっこ抜きます～ 平家 明澄 東京都 6年

日常の中の宝物 大石 未都 福岡県 6年

「海の管制官」のお仕事体験 志賀 優龍 愛知県 6年

忘れられない絵 岡崎 翔大 東京都 2年

西九条祭のお神こし 末廣 緋菜帆 大阪府 4年

くさい！知りたい！タクシーのなぞ 申 ハナ 福岡県 2年

中学生の部

受賞作品



大賞 木守り柿

宗 佑樹 福岡県 明治学園中学校 1年

優秀賞 過去形の町、浜通りで学ぶ

安部 愛禾 茨城県 牛久市立 牛久南中学校 2年

祖母の葬式

前田 海音 北海道 藤女子中学校 3年

選考委員特別賞

あさの  
あつこ賞 おおきいおうち

谷藤 緑 東京都 渋谷区立 原宿外苑中学校 2年

最相葉月賞 「ちがいを乗り越える歌の力」美しいハーモニ

創りを教わった児童合唱団での8年間、  
ドーソン ソフィー和奉江 東京都 アメリカン・スタイル、イン・ジャパン 3年

リリー・  
フランキー賞 海辺の白花

新垣 結菜 沖縄県 昭和薬科大学 附属中学校 2年

最終候補作品

まちの本屋さんが教えてくれたこと  
〜小林由美子さんとの出会いを通して〜  
若井 七海 広島県 3年

歌う自主研究 〜オペラに臨んだ3年間〜  
長田 彪睦 東京都 3年

「ただいま。」  
稲盛 智人 鹿児島県 3年

すっぱん  
川西 李花 徳島県 1年

絶滅危惧種の誇り  
大塚 楽々 鹿児島県 3年

澄みきる瞳  
三田 優菜 岩手県 1年

十年後のグランドピアノ  
小田 葉喜 福岡県 1年

不登校  
真理子 (ペンネーム) 沖縄県 2年

ピアノに出会い、夢に出会った  
中島 彩夏 埼玉県 2年

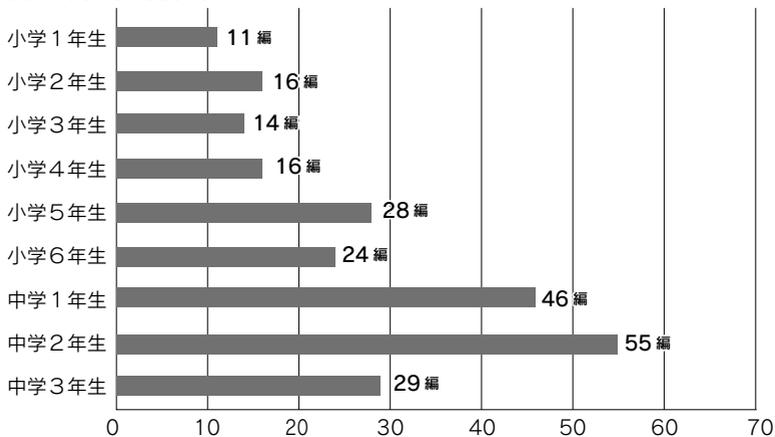
私の考える日本版『国民皆保険』の問題点と課題  
中川 瑞祥 大分県 2年

# (令和7年度)第17回 子どもノンフィクション文学賞応募状況

◎応募受付数 **239** 編 (昨年 232 編)

小学生 109 編 (昨年 133 編) / 中学生 130 編 (昨年 99 編)

## ◎応募者学年別構成



## ◎応募者地域別構成

地域	応募数			九州内訳 (再掲)	応募数		
	小学生	中学生	計		小学生	中学生	計
北海道	0編	2編	2編	福岡県	29編	27編	56編
東北	4編	6編	10編	(うち市内)	(25)編	(4)編	(29)編
関東	40編	32編	72編	佐賀県	0編	0編	0編
信越	2編	0編	2編	長崎県	0編	0編	0編
北陸	0編	0編	0編	熊本県	0編	1編	1編
東海	1編	3編	4編	大分県	0編	1編	1編
近畿	10編	15編	25編	宮崎県	0編	0編	0編
中国	1編	4編	5編	鹿児島県	10編	16編	26編
四国	4編	7編	11編	沖縄県	0編	15編	15編
九州	39編	60編	99編				
海外	8編	1編	9編				
合計	109編	130編	239編	合計	39編	60編	99編

## 事前選考委員

(五十音順)

相本 倫子 石橋 聡 伊藤 和人 神村 恭子 高嶋 健 山崎 良恵

第17回子どもノンフィクション文学賞

# 受賞作品集

二〇二六年三月二十一日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三二〇八一三 北九州市小倉北区城内四一

電話 〇九三二五七一五〇五

FAX 〇九三二五七一五二二五

印刷・製本 有限会社 青雲印刷

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。

# 子どもノンフィクション文学賞



主催：北九州市 北九州市教育委員会 協賛：日本児童図書出版協会

後援：朝日学生新聞社 公益社団法人全国学校図書館協議会 公益財団法人海外子女教育振興財団

